惣作遺跡発掘調査報告

～三重県津市殿村所在～

２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の県庁所在地である津市は県のほぼ中央部に位置し、東には伊勢湾、西には鈴鹿山脈の豊かな自然環境と温暖な気候に恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきました。今回発掘調査が行われた惣作遺跡の所在する安濃川流域には、弥生時代の中心的な集落として著名な納所遺跡があり、津市から安濃町にかけて広がる長谷山には４００基以上からなる群集墳が築かれるなど、古くからの人々の生活の営みを知ることができます。

今回報告します惣作遺跡は、安濃川の右岸に位置し、現在は古代からの条里制の地割を残した水田地帯であります。この地域では、近年一般国道23号中勢道路建設や県営ほ場整備に伴う発掘調査が行われ、歴史を究明する上で重要な成果が蓄積されているところであります。しかしながら、一方でこのような遺跡が記録保存という形でしか残せないことは残念というほかありません。これまでに得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。この報告書が地域の歴史文化を考える材料となり、普及公開に活用されれば幸いです。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、津地方県民局農林水産商工部、津中部土地改良区などの関係諸機関から多大なご協力と温かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

2002年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　**桂川　哲**

例　言

1　本書は、三重県津市殿村に所在する惣作遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の発掘調査は平成12年度県営ほ場整備事業（津中部地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　発掘調査は平成12年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　調査第一課　技師　水谷　豊、主事　宮田勝功
　資料普及グループ　研修員　萩　良樹、川合圭子、清水実華
土工担当　(財)三重県農業開発公社
　主幹　飯田久志、　嘱託　酒井巳紀子
調査期間　平成12年６月12日～同年12月28日
調査面積　惣作遺跡　1,300m²
　　里前遺跡　1,300m²

なお、里前遺跡（第２次）の調査成果ついては平成14年度に報告する。

4　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループの協力を得て行った。遺構の写真撮影は水谷・宮田が行い、遺物の写真撮影・本文の執筆・全体の編集は水谷が行った。

5　調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農林水産商工部、津地方県民局農林水産商工部、津中部土地改良区、津市教育委員会からの協力を得た。また、立命館大学青木哲哉氏、津東高等学校服部久志氏、津市教育委員会の各位から有意義な御指導・御教示を賜った。

6　本書の方位は、第Ⅳ座標を基準とする座標北を用いた。

7　挿図と写真図版の番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。

8　本書での用語は、以下の通り統一した。
　つき…「杯」「坏」等があるが、「杯」を用いた。
　わん…「椀」「碗」等があるが、「椀」を用いた。

9　本書での遺構番号は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格により以下の略記号をつけた。
ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝、自然流路　ＳＸ…方形周溝墓
ＳＫ…土坑　ＳＺ…落ち込み、不明遺構　ｐｉｔ…ピット、柱穴

10　発掘調査の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 7
Ⅲ　調査の成果 …… 9
Ⅳ　結語 …… 39

挿 図 目 次

第１図　惣作遺跡・里前遺跡調査区位置図・試掘坑配置図 …… 2
第２図　遺跡位置図 …… 6
第３図　Ａ地区平面図・土層断面図 …… 10
第４図　Ｂ地区平面図・土層断面図（１） …… 11･12
第５図　Ｂ地区平面図・土層断面図（２） …… 13･14
第６図　ＳＸ３３平面図・土層断面図 …… 15
第７図　ＳＫ９Ⅲ層遺物出土状況図 …… 16
第８図　ＳＫ９Ⅱ層遺物出土状況図 …… 17
第９図　ＳＫ９Ⅰ層遺物出土状況図 …… 18
第10図　ＳＫ９平面図・土層断面図 …… 19
第11図　ＳＺ４遺物出土状況図 …… 20
第12図　ＳＢ59実測図 …… 21
第13図　ＳＢ60実測図 …… 21
第14図　ピット実測図 …… 22
第15図　調査区断ち割り土層断面図 …… 23
第16図　ＳＸ33他、ＳＺ４出土遺物 …… 28
第17図　ＳＫ９Ⅰ層出土遺物 …… 29
第18図　ＳＫ９Ⅰ層出土遺物 …… 30
第19図　ＳＫ９Ⅰ層・Ⅱ層出土遺物 …… 31
第20図　ＳＫ９Ⅱ層・Ⅲ層出土遺物 …… 32
第21図　ＳＤ40・41・11・29他出土遺物 …… 33
第22図　遺跡周辺字切り図 …… 42
第23図　条里復原プラン、条里推定溝配置図 …… 43

表　目　次

第１表　試掘調査結果一覧表（１） …… 3
第２表　試掘調査結果一覧表（２） …… 4
第３表　遺構一覧表 …… 24
第４表　出土遺物観察表（１） …… 34
第５表　出土遺物観察表（２） …… 35
第６表　出土遺物観察表（３） …… 36
第７表　出土遺物観察表（４） …… 37
第８表　出土遺物観察表（５） …… 38

図 版 目 次

図版１　Ａ地区全景（西から）／Ｂ地区調査前風景 …… 44
図版２　Ｂ地区a-0～c-2（東から）／Ｂ地区a-0～c-2（西から） …… 45
図版３　Ｂ地区c-2～r-2（西から）／Ｂ地区作業風景（西から） …… 46
図版４　Ｂ地区l-0～r-2（西から）／Ｂ地区l-0～r-2（東から） …… 47
図版５　Ｂ地区r-2～r-5（東から）／Ｂ地区r-8～z-8（南から） …… 48
図版６　Ｂ地区r-8～ア-8（東から）／Ｂ地区r-8～エ-16（北から） …… 49
図版７　ＳＢ５９（北から）／ＳＢ５９（南から） …… 50
図版８　ＳＫ９Ⅰ層遺物出土状況（東から）／漆入り鉢／ＳＫ９Ⅲ層出土遺物（東から）／ＳＫ９完掘（東から）／ＳＺ４遺物出土状況（西から）／ＳＤ13土層（南から）／ＳＤ12土層（西から）／ＳＤ11土層（西から） …… 51
図版９　出土遺物（１） …… 52
図版10　出土遺物（２） …… 53
図版11　出土遺物（３） …… 54
図版12　出土遺物（４） …… 55
図版13　出土遺物（５） …… 56
図版14　出土遺物（６） …… 57
図版15　出土遺物（７） …… 58
図版16　出土遺物（８） …… 59

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

(1) 調査に至る経緯

平成９年度から計画された津中部地区の県営ほ場整備事業に伴い、県埋蔵文化財センターでは県農林水産商工部・津地方県民局農林水産商工部と協議を重ねながら随時試掘調査を行い、現状保存困難な部分について本調査を行っている。その結果、平成９～11年度には神戸遺跡や替田遺跡で試掘調査・本調査が行われている[1]。

替田・弐ノ坪・惣作・里前遺跡の所在する地域については平成11年度に試掘調査を行った。その結果、遺構の存在が明らかになった地点について協議を行った結果、惣作遺跡1,300m²、里前遺跡1,300m²が平成12年度本調査を行うこととなった。惣作遺跡（遺跡番号824）・里前遺跡（遺跡番号761）は、ともに周知の遺跡である。

周辺ではほ場整備事業の他にも国道23号中勢道路建設に伴う発掘調査が行われており、平成８～10年にかけては替田遺跡・弐ノ坪遺跡・里前遺跡で発掘調査が行われている[2]。またそれに直行する形で国道163号バイパスの建設に伴う替田遺跡の発掘調査も平成11・13年度に行われている。

(2) 試掘調査結果

今回の発掘調査に伴う試掘調査は、平成11年度に行われている。替田遺跡・弐ノ坪遺跡・惣作遺跡・里前遺跡の所在する277,350m²を対象に２×４ｍの試掘坑を212ヶ所設定した。試掘調査結果は以下の第１・２表の通りである。

替田遺跡・弐ノ坪遺跡では、69ヶ所の試掘坑のうち16ヶ所でピット・土坑・溝等の遺構を確認した。遺構は中勢道路予定地に近いところで見られるが、やや希薄である。遺物は弥生土器・須恵器・土師器片が見られた。三泗川近くでは一部で現地表面より２ｍほど掘り下げたものの明確な遺構面は捉えられず、旧流路にあたると考えられる。

惣作遺跡では、40ヶ所の試掘坑のうち19ヶ所でピット・土坑・溝等の遺構を確認した。試掘坑116や122からは、0.8×0.7ｍ程度の方形の柱穴が見つかり、古代の集落の存在が明らかになった。また、弥生中期頃の土器や飛鳥・奈良時代と思われる須恵器・土師器が見つかり、弥生中期～古代にかけての集落の存在が想定された。

里前遺跡では、51ヶ所の試掘坑のうち17ヶ所で井戸・ピット・土坑・溝等の遺構を確認した。遺構・遺物の集中するところと流路とが交互に確認され、微高地上に集落が営まれていることが確認された。試掘坑266では井戸が確認された。曲物を伴う山茶椀などが出土する鎌倉時代の井戸である。試掘坑252からは炭・焼土を含む土坑から完形の土師器皿が出土している。流路と思われる層からは弥生後期頃の遺物の出土が見られ、遺構・包含層からは土師器等、中世を中心とした遺物が出土している。

惣作遺跡と里前遺跡の間にあたる上坪地区・浜垣内地区では表土からは若干の遺物は出土したものの遺構は見られなかった。

なお、この試掘調査結果による発掘調査は、平成13年度にも行われている。

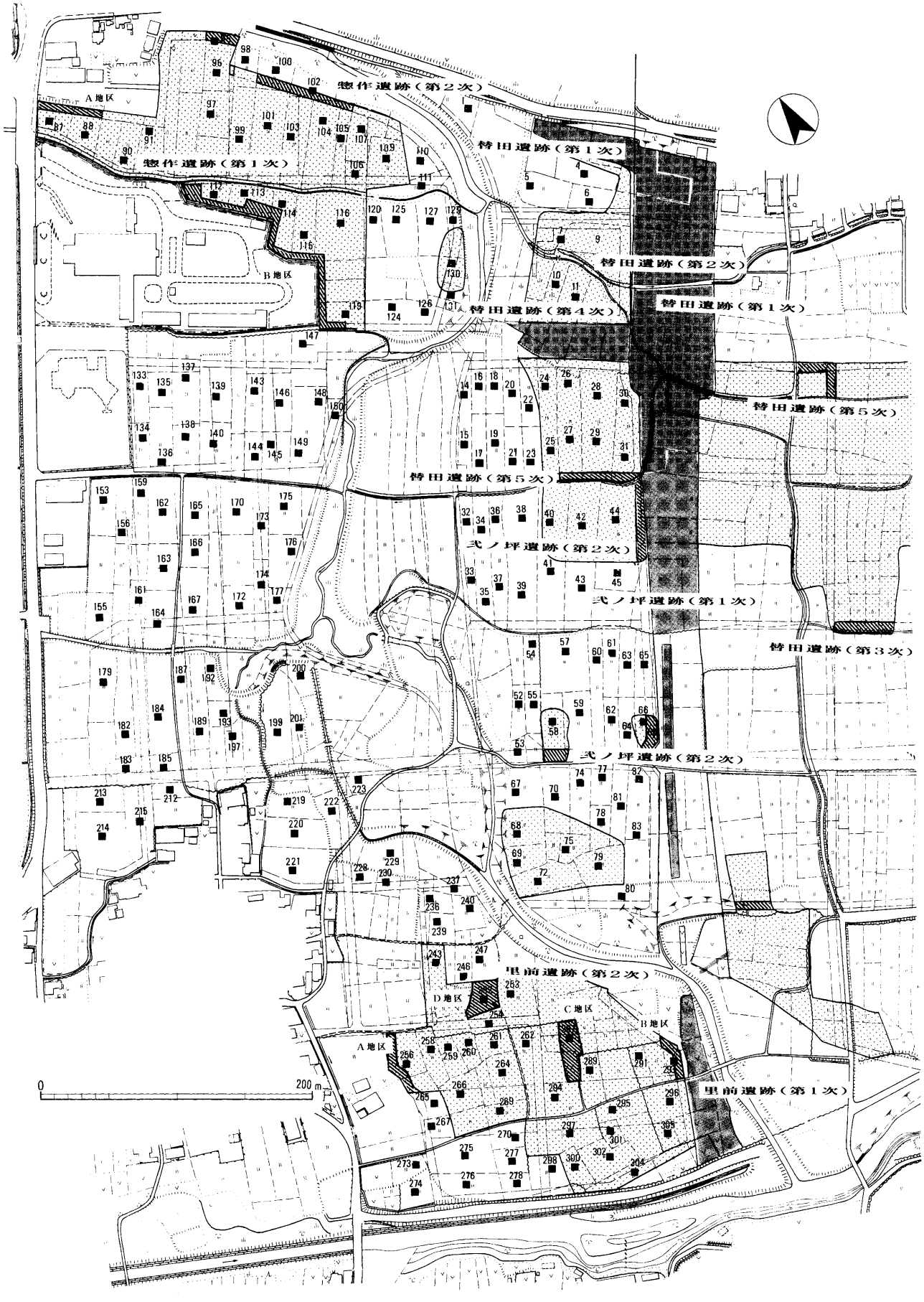
2　調査の経過

(1) 調査経過概要

平成12年度の発掘調査は、惣作遺跡２地区（Ａ・Ｂ地区）、里前遺跡４地区（Ａ～Ｄ地区）について行った。調査面積は惣作遺跡1,300m²、里前遺跡1,300m²である。

調査期間は平成12年６月12日～12月28日である。蒸し暑い梅雨の時期から西風の冷たい冬にかけての長い期間にわたる調査であったが、作業員の方々の暖かいご配慮とご協力により無事終了することができた。御芳名を記し、感謝の意を表する。

荒川菊代、池村治、池村久寿子、池村昭子、
池村美智子、伊東悦子、伊東権一、尾市隆之、
岸田恭子、岸田正司、黒川勘一、黒川幸、
杉田百合子、舘　正志、田中正子、田中正次、
矢代せつ子　　（五十音順、敬称略）



第１図　惣作遺跡・里前遺跡調査区位置図・試掘坑配置図（1：4,000）

替田遺跡試掘調査結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
1				
2				欠番
3				欠番
4				
5			土師器	
6				
7		77cm		
8				欠番
9			土師器	
10		55cm	土師器	
11		46cm	土師器	
12				欠番
13				

弐ノ坪遺跡試掘調査結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上層の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				
26	40cm	90cm	土師器	
27		30cm	土師器、須恵器	
28	30cm		土師器、須恵器	
29		30cm		
30	40cm		弥生土器、土師器、須恵器	
31	30cm			
32				
33				
34				
35				
36				
37				
38				
39				
40		40cm		
41				
42				
43				
44				
45				

46～51　欠番

52				
53				
54				欠番
55				
56				欠番
57				
58		20cm		
59				
60				
61				
62				
63				
64				
65				
66		30cm		
67				
68		50cm		
69		45cm		
70				
71				欠番
72		50cm		
73				欠番
74				
75		30cm		
76				
77				
78				
79	35cm	65cm		
80				
81				
82				
83				
84				欠番
85				欠番
86				欠番

惣作遺跡試掘結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上層の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
87	35cm	45cm	土師器	
88		30cm	土師器	
89				
90				
91				
92				
93				
94				欠番
95		30cm	土師器	
96				
97	25cm	45cm	弥生土器	
98				欠番
99				欠番
100	30cm	45cm		
101	20cm	30cm		
102	35cm	50cm	弥生土器、土師器	
103				
104	20cm	40cm	土師器	
105		55cm	土師器	
106				
107				
108				欠番
109		40cm	須恵器(壷)、土師器	
110				
111				
112	25cm		土師器、須恵器	
113	20cm	40cm	弥生土器、土師器、青磁	
114	20cm	40cm	土師器杯、須恵器	
115	20cm	30cm	土師器	
116	25cm	40cm		
117				欠番
118				欠番
119	15cm	45cm	弥生土器(壷)	
120		35cm		
121				
122		30cm		
123				欠番
124		40cm	陶器	
125				欠番
126				
127				
128		40cm		
129		30cm	山茶椀、磁器	
130	25cm	45cm	土師器、須恵器、瓦	
131				
132				欠番

上坪地区試掘調査結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
133				
134				
135		80cm		
136				
137		20cm	土師器	
138				
139				
140				
141				欠番
142				欠番
143				
144				
145				
146				
147				
148				

第１表　試掘調査結果一覧表(１)

149			山茶椀	
150				
151				欠番
152				欠番
153				
154				欠番
155				
156				
157				欠番
158				欠番
159				
160				欠番
161				
162				
163				
164				
165				
166				欠番
167				
168				欠番
169				欠番
170				
171				
172				
173				
174				
175				
176				

浜垣内地区試掘結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
177			山茶椀	
178				欠番
179				
180				
181				欠番
182				
183				
184				
185				
186				欠番
187				
188				欠番
189				
190				欠番
191				欠番
192				
193				
194				欠番
195				欠番
196				欠番
197				
198				欠番
199				
200				
201				

202～212まで欠番

213			陶器	
214				
215				
216				
217				欠番
218				欠番
219				
220				
221				
222				
223				
224				欠番
225				
226				欠番
227				欠番
228				
229				

里前遺跡試掘結果一覧表

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺物	備考
230				
231				欠番
232				欠番
233				
234				欠番
235				欠番
236				
237				欠番
238				欠番
239				
240				
241				欠番
242				欠番
243		20cm		
244				欠番
245				欠番
246			土師器、青磁	
247				
248				欠番
249				欠番
250				欠番
251		30cm		
252		30cm	土師器、陶器、山茶椀	
253	30cm	40cm		
254	20cm		土師器	
255				欠番
256		35cm	土師器	
257	20cm	50cm	弥生土器、土師器	
258	30cm		須恵器	
259				
260				
261		30cm	土師器	
262		20cm	土師器	
263				欠番
264				
265				
266	20cm	50cm	土師器、山茶椀	
267				
268				欠番
269				
270				
271				欠番
272				欠番
273	25cm	45cm	土師器、山茶椀	
274			土師器	
275				
276				
277				
278				
279				欠番
280				
281				欠番
282				欠番
283				欠番
284				欠番
285				欠番
286				欠番
287	20cm	40cm	土師器、須恵器、山茶椀	
288				欠番
289				
290				欠番
291				
292				欠番
293		30cm	土師器、陶器	
294	30cm	60cm	陶器	
295				
296			陶器、瓦	
297				
298				
299				欠番
300		35cm	須恵器、山茶椀、陶器	
301				
302	40cm	50cm	陶器	
303				欠番
304			陶器	
305		30cm		

第２表　試掘調査結果一覧表（２）

(2) 調査日誌（抄）（惣作遺跡・里前遺跡）

5月30日　現地協議

6月12日　惣作遺跡A地区から重機による表土掘削開始。

6月19日　人力掘削開始。遺構希薄。

6月20日　A地区遺構検出、遺構掘削。溝２条のみ。土層図作成。

6月22日　清掃・写真撮影。B地区人力掘削開始。

7月３日　久々の作業。奈良時代頃の土師器・須恵器（杯・椀等）が多量に出土。

7月５日　遺物が出土するところは流路上層の落ち込みと円形の土坑（ＳＫ９)からと判明。完形の土器が多い。

7月10日　方形周溝墓（ＳＸ33）検出。

7月11日　遺構掘削。ＳＫ９上層実測。

7月18日　ＳＫ９を粘土層まで掘削。下に黒色粘質土があり、遺物が出土。

7月24日　水道局東側遺構検出。基盤が粗砂で、流路と思われる。

7月25日　方形周溝墓の続き部分を拡張。大型の柱穴を確認。

7月26日　拡張部遺構検出・掘削。方形周溝墓は３基程度になりそう。柱穴多数検出。

8月４日　清掃・写真撮影。

8月７日　実測開始。表土掘削。

8月11日　津東高校服部久志先生、高校生１名体験発掘。

8月18日　拡張部清掃・写真撮影。ＳＫ９底から完形の土師器甕・斎串が複数出土。

8月25日　ＳＫ９掘削完了。B地区最後まで表土掘削完了。南部は流路内と思われ、遺物は小破片のみ。

8月29日　清掃・写真撮影。掘削作業終了。

9月１日　遺構実測。立命館大学青木先生来訪。

9月４・５日　青木先生来訪。御教示を得る。

9月７日　惣作遺跡調査終了。里前遺跡A地区表土掘削開始。

9月14日　人力掘削開始。調査区内は大半が流路で、弥生後期頃から近世までの遺物が出土。

9月19日　調査区南端から弥生後期～古墳時代前半の土器が多量に出土。

9月26日　A地区井戸（ＳＥ54)掘削。木組が見つかる。B地区包含層掘削。検出。ピットが多数見つかる。

9月28日　B地区ピット掘削。深いものが多い。

10月11日　B地区流路掘削。中世末から近世初頭の陶器・瓦が多量に出土。C地区表土掘削。

10月13日　B地区実測。C地区遺構検出。山茶椀・山皿がほぼ完形で出土。

10月16日　B地区土層除去時に井戸（ＳＥ68）検出。C地区遺構掘削。

10月18日　B地区井戸（ＳＥ68）掘削。曲物内から土師器皿・漆椀等が出土。

10月19日　青木先生来訪。御教示を受ける。井戸掘削。写真撮影。

10月24日　曲物取り上げ。B地区終了。

10月30日　C地区遺構掘削。

11月６日　D地区表土掘削開始。

11月７日　C地区遺構掘削。南側から清掃開始。５基目の井戸らしき遺構を確認。D地区遺構検出。

11月８日　C地区清掃・写真撮影。D地区遺構検出。

11月13日　C地区北部重機による掘削。D地区遺構掘削。

11月14日　C地区井戸と思われる遺構を重機により断ち割り。非常に深い。

11月16日　断ち割り作業続き。中央の遺構（ＳＫ71）で曲物確認。

11月22日　C地区清掃、写真撮影

11月27日　ＳＫ71曲物取り上げ。D地区遺構掘削。

11月29日　C地区終了。

12月21日　D地区清掃・写真撮影。

12月22日　写真撮影。実測開始。

12月28日　調査終了。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）にかかる諸通知は、「里前遺跡（第２次)他」として、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項
（県教育長あて）
平成12年５月29日付け農基第320号
・法第58条の２第１項（県教育長あて）
平成12年６月19日付け教埋第86号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（津警察署長あて）
平成13年３月５日付け教生229-17号（県教育長通知）

3　調査の方法（惣作遺跡）

(1) 小地区の設定について

Ａ地区の調査では、調査区の幅が狭いことから西端をＡ１とし、４ｍごとにＡ２、Ａ３…とした。Ｂ地区の調査では調査区内を４ｍ四方の桝目で切ることによって、小地区を設定した。小地区は北から数字、西からアルファベット・カタカナを付け、桝目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標とは無関係である。

(2) 遺構図面について

Ａ地区の平面図は平板測量を用いて１／100の図面を作成した。Ｂ地区の平面図は、遺構の希薄であったア８～オ18については平板測量を用いて１／100の図面を作成し、その他は１／20の図面を作成した。また、掘立柱建物・井戸・土器出土状況などは個別に１／10の図面を作成した。

註

（1）中川　明『神戸遺跡発掘調査報告－鳥居前地区－』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
柴山圭子他『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）
（2）『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅺ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

第２図　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院『津東部』『津西部』（1：25,000）より〕

Ⅱ　位置と歴史的環境

伊勢平野の西に連なる鈴鹿山脈の南部に位置する錫丈ヶ岳に源を発する安濃川は、下流域に南北約３㎞程の肥沃な沖積平野を形成し、津市島崎町付近で伊勢湾に注ぐ。惣作遺跡①は安濃川右岸の自然堤防上に位置する。周辺には弥生時代以降多くの遺跡が存在する。以下発掘調査例を中心に弥生時代以降の周辺の遺跡について概観する。

安濃川流域の弥生時代を語る上でまずあげられるのは納所遺跡②であろう[1]。安濃川下流域左岸の自然堤防上に所在し，前期から後期に至る遺物を出土しており、この辺りの拠点的な集落として位置付けられている。安濃川右岸では納所遺跡にやや遅れて半田丘陵上に上村遺跡③が出現する[2]。上村遺跡では後期までの遺物が見られ、丘陵上の中心的な集落である。この他、殿村遺跡④や森山東遺跡⑤[3]・松ノ木遺跡⑥[4]などでも前期の土器が出土している。森山東遺跡では遠賀川系の土器が出土した水田跡が検出され、松ノ木遺跡では前期末に遡る可能性のある方形周溝墓が検出されている。

中期になると、安濃川流域の遺跡数は増加する。前半には、右岸では替田遺跡⑦[5]・弐ノ坪遺跡⑧[6]、左岸には蔵田遺跡⑨[7]等が上げられる。替田遺跡・弐ノ坪遺跡では竪穴住居が検出され、蔵田遺跡では掘立柱建物が検出されている。また蔵田遺跡では灌漑用の溝と井堰が確認されており、生産遺跡として注目される。替田遺跡・弐ノ坪遺跡では、墓の可能性のある土坑が多数検出されており、同様のものが納所遺跡や亀井遺跡⑩[8]でも見られる。同時期の墓制では納所遺跡や蔵田遺跡で方形周溝墓が確認されている。

これら沖積地に出現した遺跡は、中期後半になると遺構・遺物ともはっきりしなくなる。それと同時期に長岡丘陵上に200棟以上の竪穴住居が確認された長遺跡⑪[9]や山籠遺跡⑫[10]等が出現することは非常に興味深い。これらの遺跡は後期まで存続せずに短期間に姿を消すという特徴がある。

後期には丘陵上や裾部に遺跡が多く見られる。また、安濃町大城遺跡[11]・前田遺跡[12]、大ヶ瀬弥生墳丘墓⑬[13]・高松弥生墳丘墓⑭[14]・鎌切遺跡⑮など丘陵上に集団墓から脱却した墓が築かれるようになり、古墳時代に入ると安濃川流域では最古と考えられる坂本山古墳群⑯[15]が出現する。低地部では弥生時代末～古墳初頭の方形周溝墓が位田遺跡⑰[16]で見つかっている。

５世紀になると安濃川中流域には明合古墳、下流域には伊勢湾を見下ろすように全長85ｍの池ノ谷古墳という首長墓と考えられる古墳が築かれる。後期には殿村１号墳⑲・おこし古墳⑳・鎌切３号墳㉑・御屋敷跡13号墳㉒のような全長30ｍ程度の前方後円墳が分散して見られる。また長谷山東麓には総数500基を超える長谷山古墳群があり、その一支群である平田古墳群㉓が調査されている[17]。替田遺跡では石釧が出土しており、注目される。

奈良・平安時代には、安濃川流域は安濃郡に編入される。官道は、東海道が鈴鹿関で分岐し、伊勢・志摩国府を指向する伊勢道が通過していることが文献から確認できるが、そのルートや安濃郡に設置された「市村駅」については確認されていないものの、津市殿村・野田付近が有力な説として上げられている[18]。当時の遺跡としては、安濃町浄土寺南遺跡㉔[19]や浄土寺米買遺跡㉕[20]で奈良・平安時代の竪穴住居・掘立柱建物・井戸などの遺構や円面硯・緑釉陶器などが出土し、地方官衙的な集落と考えられている。替田遺跡や里前遺跡では石帯が出土し、官人層の存在が窺われている。

安濃川流域は近年まで条里制の方画地割が良好に残っていた地域で、N30°Ｅの条里プランの復元が提示され[21]、発掘調査でもその方向に沿った遺構が確認されている。弐ノ坪遺跡では平安時代前期と考えられる掘立柱建物が条里方向に沿って整然と並んで見つかっていることから、公的な施設の可能性が考えられている。神戸遺跡㉖では平安時代中期の掘立柱建物が検出されているが、古墳時代以前からの地割に沿ったものと条里地割に沿ったものが確認され、過渡期と考えられる[22]。安濃川左岸の位田遺跡では平安時代中期～後期の屋敷地や道路遺構が

確認され、緑釉陶器や碁石などが出土し、公的な性格を有した在地富豪層の居館と考えられている。

平安時代末～鎌倉時代にかけて替田遺跡や蔵田遺跡など安濃川沿いでも遺構は検出されるが、やがて姿を消し、耕地化していったものと考えられる。やや南に下った岩田川左岸にあたる里前遺跡㉗[23]では鎌倉時代の他にも戦国時代や江戸時代の井戸が見つかっている。里前遺跡では墨書された山茶椀が多量に出土しており、当時津の海岸線沿いに栄えた安濃津との関連が注目されている。

註

(1) 伊藤久嗣ほか『納所遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1980年)

(2) 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』(津市教育委員会　1972年)

(3) 竹内英昭「松ノ木遺跡」(『一般国道23号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年)

(4) 倉田直純・増田安生ほか「森山東遺跡」(『一般国道23号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年)

(5) 池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第１次)」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター　1997年)

水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「替田遺跡（第２次)」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998年)

(6) 池端清行・西村美幸「弐ノ坪遺跡」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998年)

(7) 米山浩之・宮田勝功ほか『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)

(8) 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」(『昭和47年度県営圃場整備事業埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1973年)

(9) 池端清行（『一般国道23号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年)

(10) 中村光司・穂積裕昌「山籠遺跡」(『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1995年)

(11)田中秀和『大城遺跡発掘調査報告書』(安濃町教育委員会　1998年)

(12)山田猛「前田遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1988年)

(13)伊藤久嗣「大ヶ瀬遺跡」(『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　日本道路公団名古屋支社　1973年)

(14)谷本鋭次『高松弥生墳丘墓発掘調査報告』(津市教育委員会　1970年)

(15) 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』(津市教育委員会　1970年)

(16) 米山浩之『一般国道23号中世道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)

(17)伊藤秋男ほか『平田古墳群』(安濃町遺跡調査会1987年)

(18)岡田登「伊勢國市村駅所在地考」(『皇學館論叢』第13巻第16号　1980年)

(19)中村信裕「安芸郡安濃町　浄土寺南遺跡」(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981年)

(20)早川裕己「安芸郡安濃町　浄土寺米買遺跡」(『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982年)

(21)仲見秀雄「奄芸・安濃・一志の条里制」(仲見秀雄・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979年)

(22)柴山圭子ほか『神戸遺跡（第２次)・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　2001年)

(23)山口格・西村美幸「里前遺跡」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅺ』三重県埋蔵文化財センター　1999年)

Ⅲ　調査の成果

1　調査区の地形と基本層位

Ａ地区は、標高約8.0m程に位置しており、現況は水田である。表土・床土下で黄灰色シルト（鉄分・マンガン粒含む）となり、これが検出面となる。自然流路２条、溝１条を確認したが、遺物は自然流路から小破片が出土したのみである。下層確認を行った結果、標高約7.1mで鉄分を含む青灰色系の砂となり、約6.8mで鉄分を含まなくなる。

Ｂ地区は標高約7.0～7.6mで南東方向に傾斜する。現況は水田である。基本的な層序は同様であるが、自然流路の埋没上にも遺構が検出される。包含層が一部で見られるが、大部分では後世の削平のため包含層は確認できない。また、水道局側は水道局の建設・Ｕ字溝埋設により撹乱されている。

2　検出した遺構

ここではＢ地区で検出された主な遺構について記述する。弥生時代の方形周溝墓・自然流路、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物・井戸・土坑・条里地割に沿う溝、時期不明の柱穴などを検出した。

(1) 弥生時代の遺構

ＳＸ33（第６図）　ｍ－０～ｐ－２付近で検出したＳＤ12・13・31・32を周溝とする方形周溝墓である。４隅に陸橋を持つもので、内側はやや直線的に、外側は曲線的に掘削されている。後世の削平により、埋葬主体などは確認できなかった。北側の溝は他のものよりも幅広く、掘り直しが行われており、２基の方形周溝墓が溝を共有している可能性がある。規模は内々で東西約8.6m、南北はＳＤ29に切られるためはっきりしないが、約6.0m程度で長方形をしている。北溝の底から壷体部（１）・甕底部（３）が出土しており、弥生中期後葉の遺構と考えられる。

ＳＸ33の近くで検出されたＳＤ14、ＳＤ21、ＳＤ23、ＳＤ24なども途中で途切れる溝であり、方形周溝墓の周溝と考えられる。周辺には更に数基の方形周溝墓が存在するものと考えられる。

自然流路　ＳＤ５・ＳＤ６・ＳＤ７・ＳＤ19

粗砂が見られる上に見られる。自然流路が埋まる最終段階の名残の溝と思われる。弥生中期頃と思われる遺物が出土しており、その頃に埋まったものと考えられる。

(2) 古代の遺構

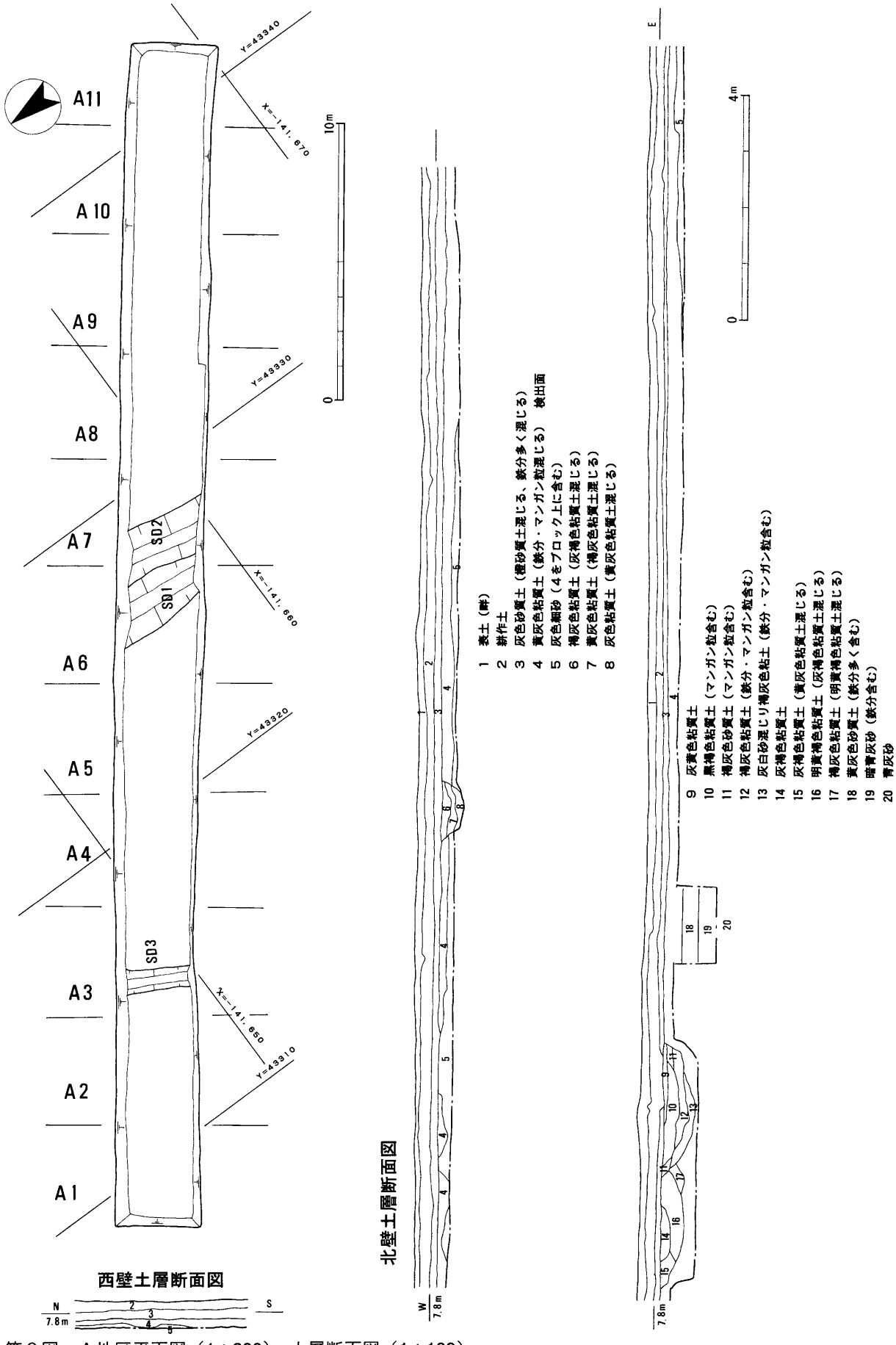
ＳＫ（ＳＥ）９（第７～10図）　ｂ・ｃ－０・１で検出した隅丸正方形の遺構である。完形を含む多量の土師器・須恵器が出土している。埋土の土層観察から３時期に分かれて利用されていたと思われる。

第Ⅲ層は井戸として利用されている。検出面から深さ約1.6m（標高約5.2m）で底となる。片側を自然流路であるＳＤ19を切る形で造られており、そこからの湧水がある。横組と思われる木材が１点出土しており、何らかの施設が作られ、井戸を埋める際に抜き取られた可能性がある。ほぼ完形の土師器甕５個体、斎串５本がやや浮いた状態で出土していること、竹筒が直立した状態で見つかっていることから、井戸を埋める際の「息抜き」の祭祀が行われたものと考えられる。

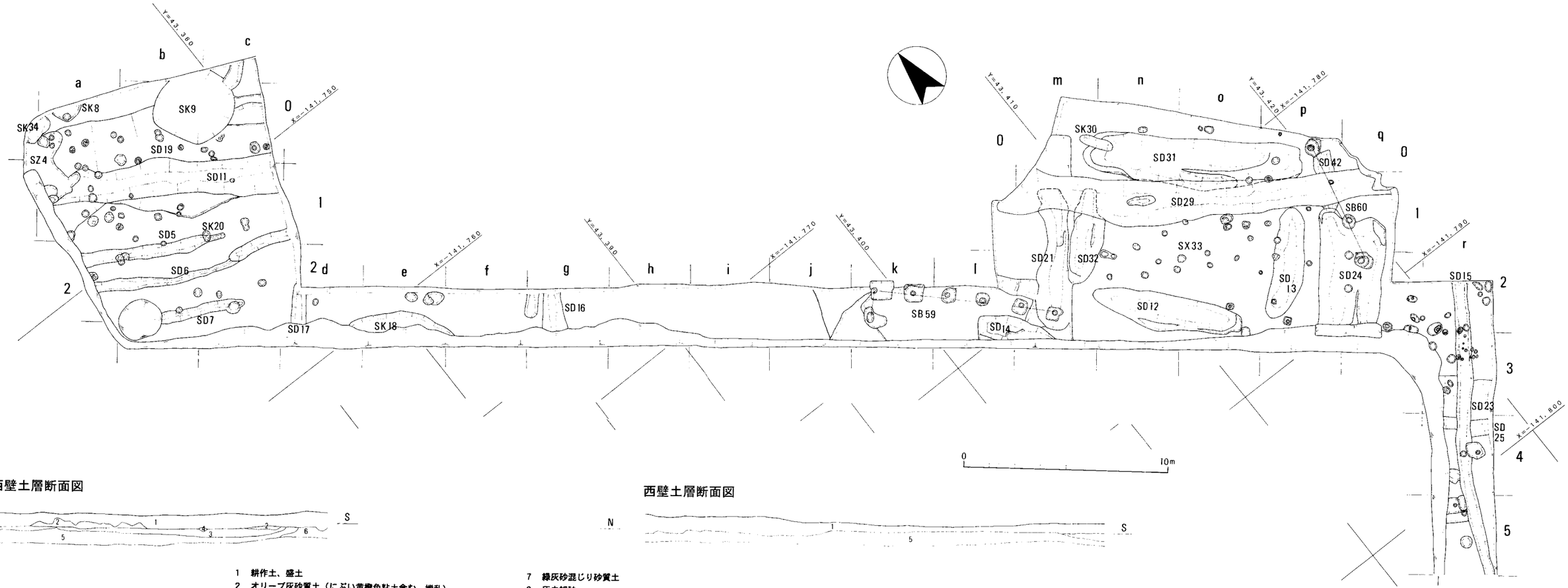
第Ⅱ層は明確な利用方法は不明である。再掘削され、廃棄土坑として利用されたものと考えられる。埋土は有機質が多く、植物遺体が含まれる。

第Ⅰ層は、最下層に明黄褐色の粘土を張り、土坑として利用されている。炭・焼土が多く混じる層が見られること、完形の土器を多量に含むことなどから、何らかの祭祀的な利用がされていた可能性が考えられる。「厨」と墨書された須恵器杯１点、土師器杯１点が出土しており、厨房施設に伴う遺構の可能性も考えられる。８世紀後葉～９世紀初頭と思われる遺物が出土している。

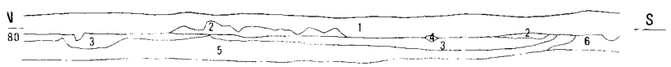
ＳＺ４（第11図）　ａ０・１で確認された不整形の遺構である。調査区の外側に広がり、水道局の建設に際に撹乱されていることから、一部しか確認できず性格は不明である。当初は炭・焼土が広がっているａ０・１～ｃ０・１の広い範囲をＳＺ４として掘削をし、黒色土部分はＳＺ４黒色土として遺物を



第３図　Ａ地区平面図（1：200）、土層断面図（1：100）



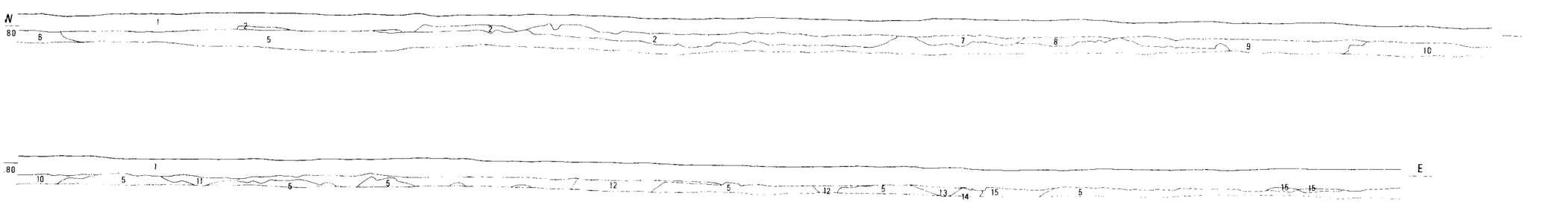
西壁土層断面図



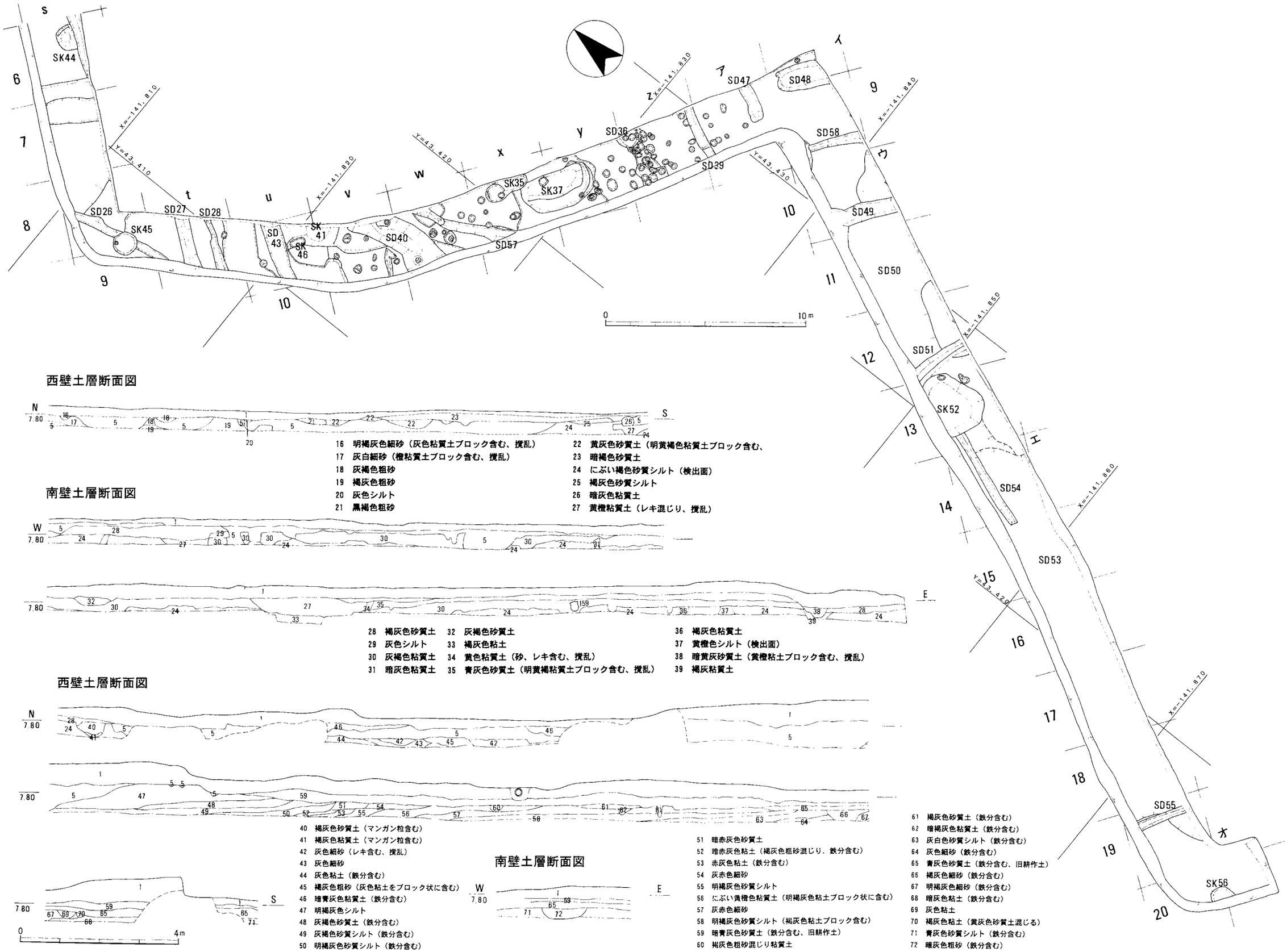
西壁土層断面図

1　耕作土、盛土
2　オリーブ灰砂質土（にぶい黄橙色粘土含む、撹乱）
3　明褐灰色砂（レキ混じり橙粘土含む、撹乱）
4　灰白細砂
5　レキ混じり橙粘土（撹乱）
6　褐灰色細砂（マンガン粒含む、遺構検出面）
7　緑灰砂混じり砂質土
8　灰白細砂
9　灰褐色粗砂（黄色粘質土含む、撹乱）
10　灰褐色粗砂
11　明緑灰色粗砂
12　褐灰色粗砂（青灰色砂ブロック状に多く含む）
13　褐灰色粗砂（青灰色粘土ブロック、レキ含む）
14　青灰色細砂
15　青灰色細砂（褐灰色砂、黄橙粘質土をブロック状に含む）

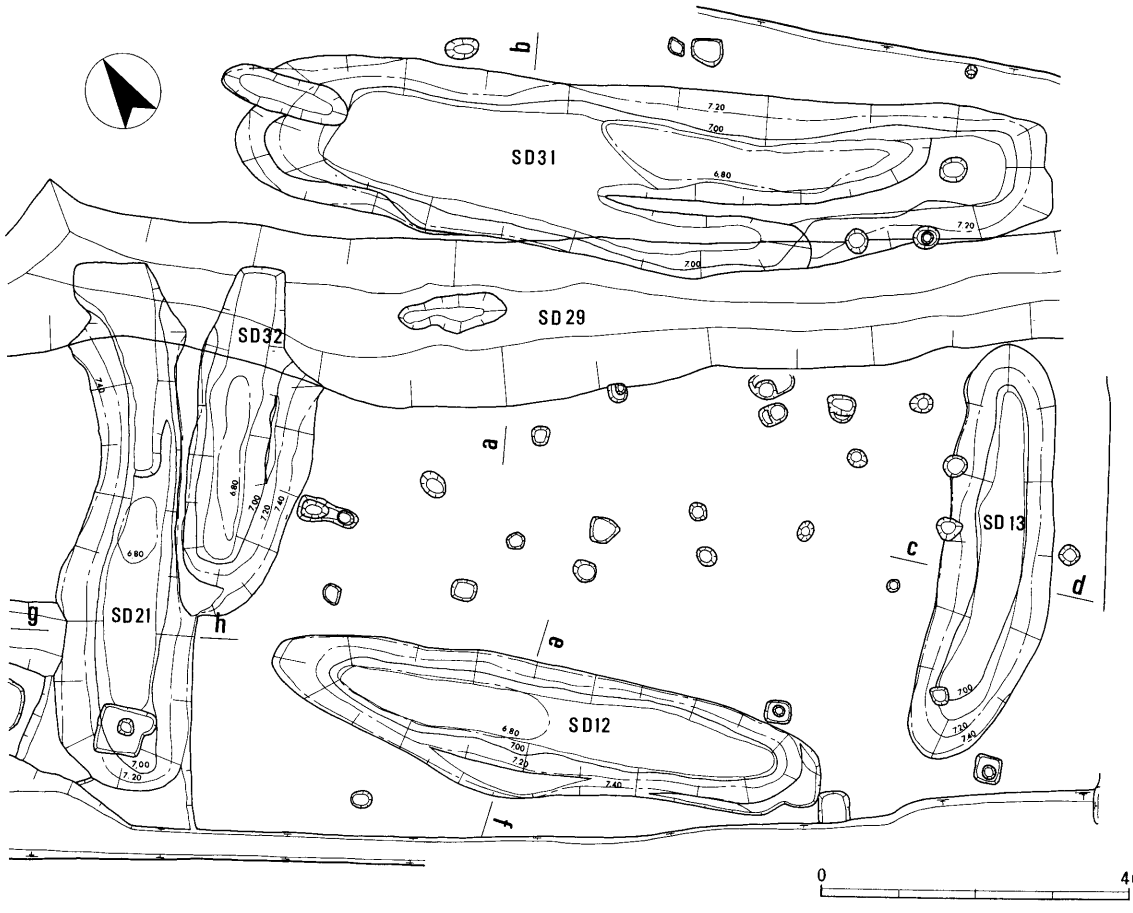
南壁土層断面図

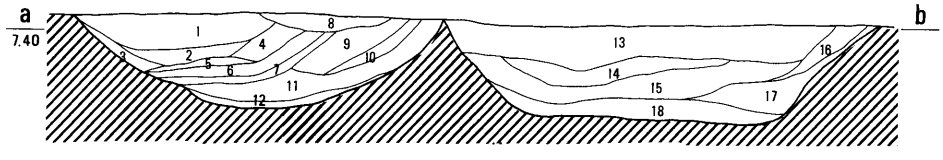


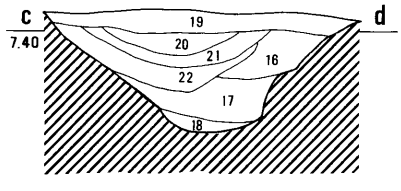
第４図　Ｂ地区平面図（1：200）　土層断面図（1：100）　（1）

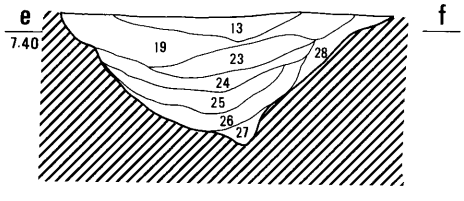


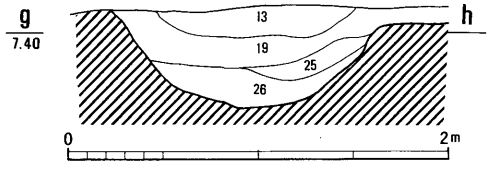
第５図　Ｂ地区平面図（1：200）　土層断面図（1：100）　（2）





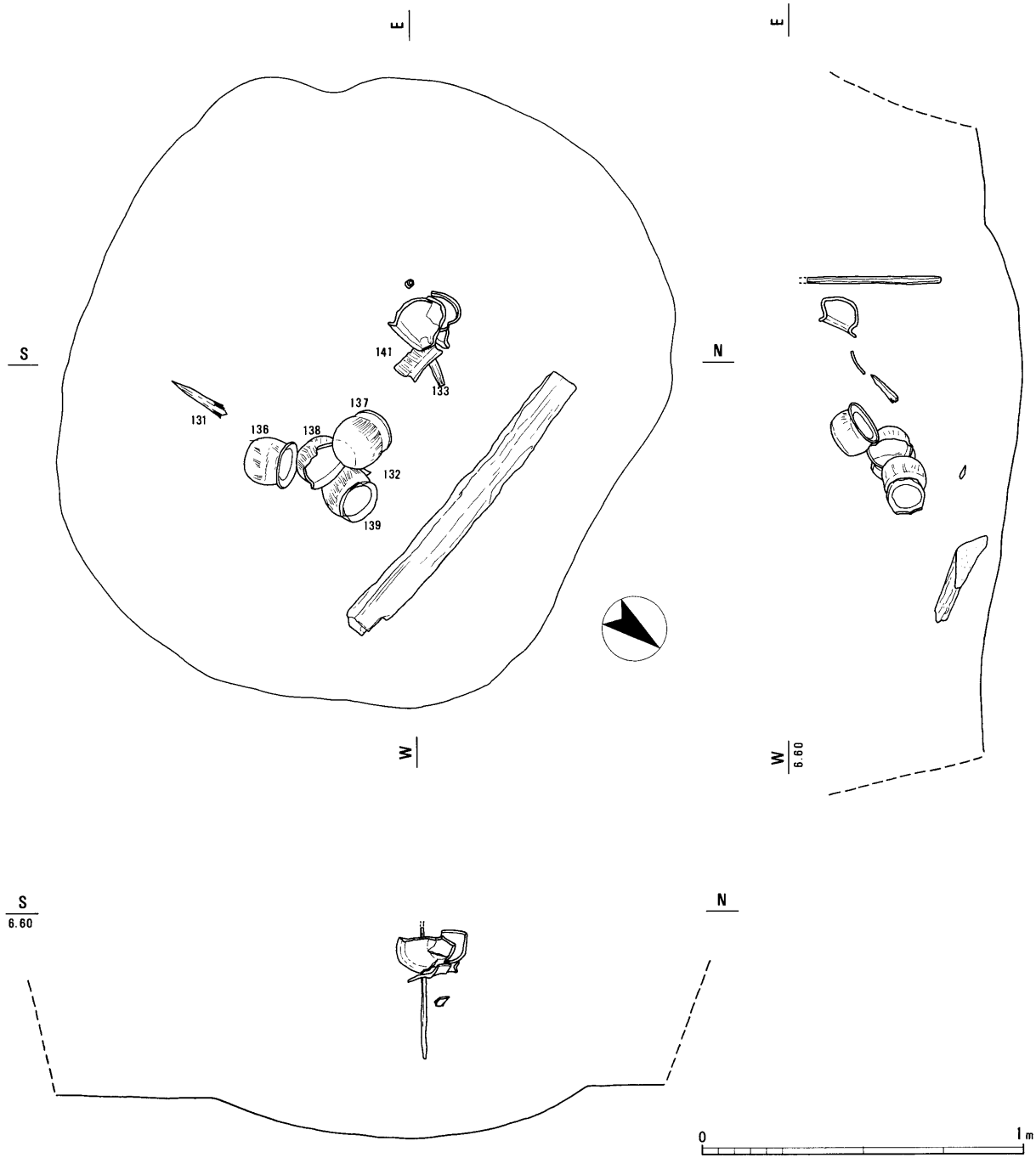




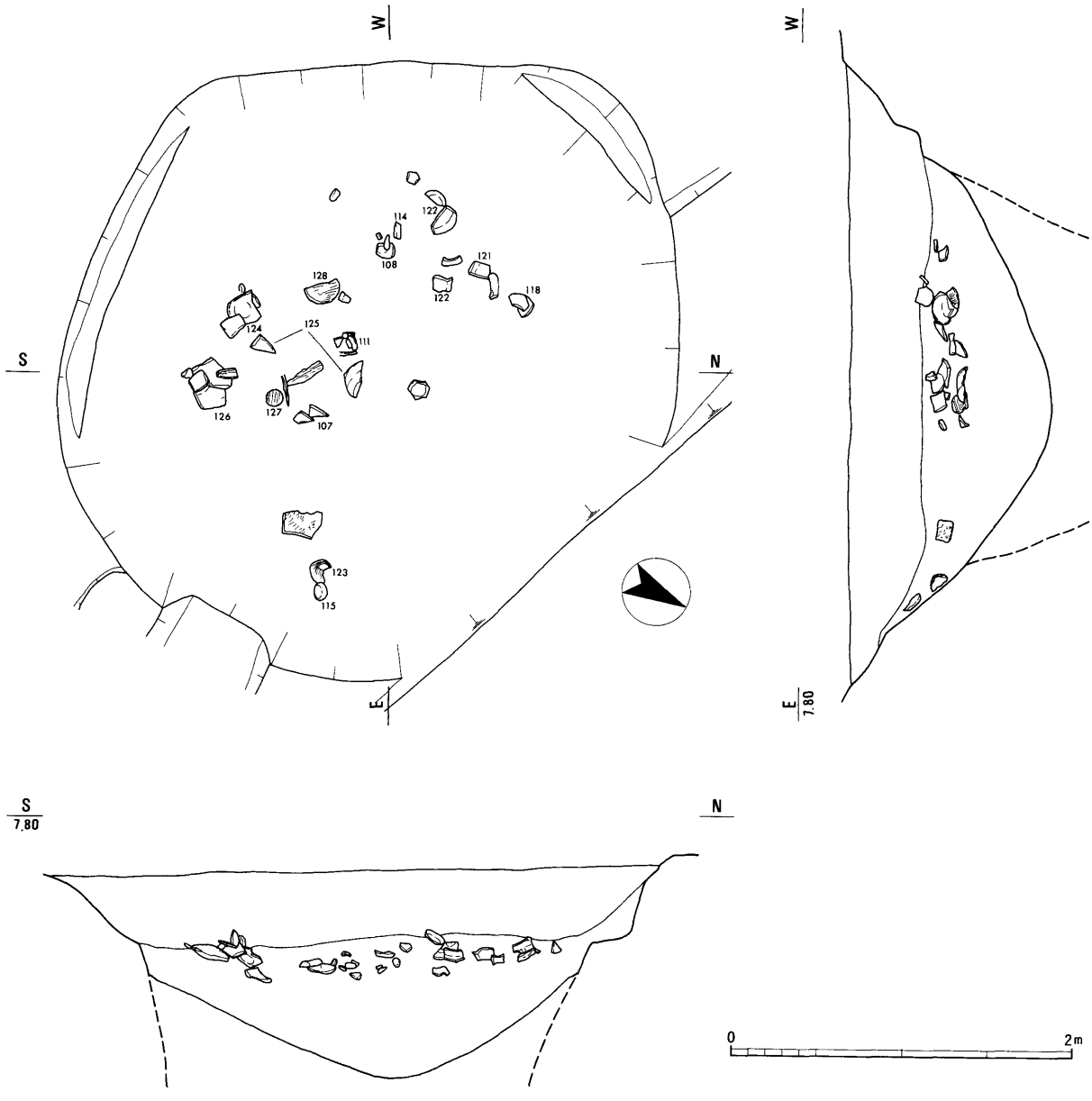


1　鈍い黄色砂質土（小石を多く含む）
2　灰黄褐色粗砂、暗灰黄シルトの互層
3　暗灰黄シルト
4　暗灰黄砂
5　灰黄色粗砂、暗灰黄シルトの互層
6　暗灰黄砂質シルト
7　鉄分層
8　暗灰黄砂（小石を多く含む）
9　暗灰黄砂（鉄分を多く含む）
10　暗灰黄砂（灰黄粘土（地山）ブロック多く含む）
11　暗灰黄砂　（鉄分を多く含む）
12　黄灰砂質シルト（灰黄粘土ブロック多く含む）
13　鈍い黄色砂（鉄分・マンガン粒含む）
14　暗灰黄砂質シルト
15　灰黄褐色砂質シルト
16　暗灰黄砂質シルト（鉄分多く含む）
17　黄灰粘質土（灰黄粘土ブロック、炭含む）
18　黄灰粘質土（灰黄粘土ブロック含む）
19　黄褐色細砂（小石を含む）
20　暗灰黄粘質土（小石を含む）
21　黄灰粘質土（鉄分含む）
22　灰黄粘質土
23　鈍い黄色砂質シルト（鉄分含む）
24　黄褐色砂質シルト
25　暗灰黄砂質シルト
26　黄灰粘質土（灰黄粘土ブロック、炭含む）
27　鈍い黄橙砂質シルトと灰白砂の互層
28　鈍い黄橙砂質シルト

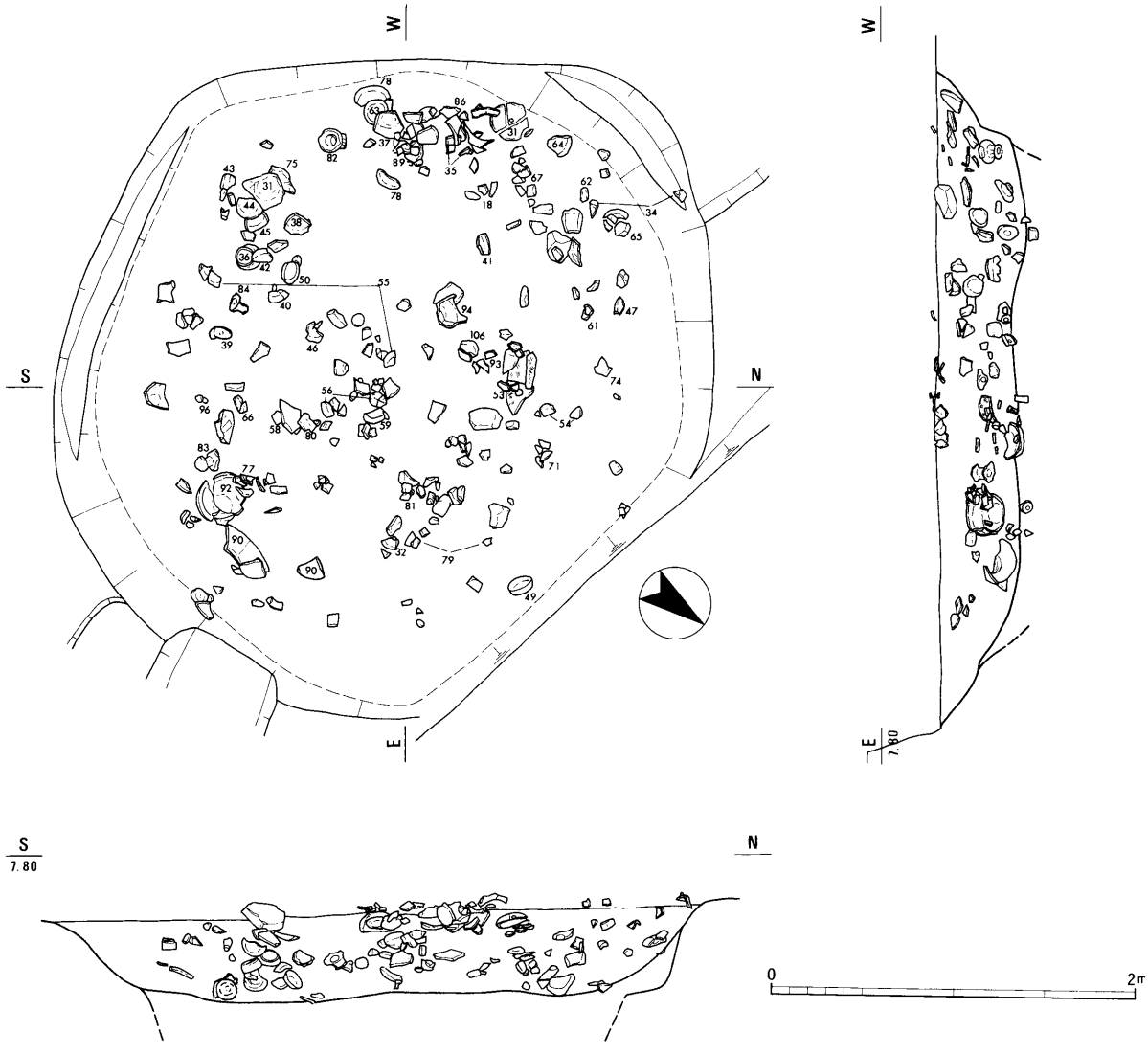
第６図　ＳＸ３３　平面図（1：100）、土層断面図（1：40）



第７図　ＳＫ９Ⅲ層遺物出土状況図（1：20）



第８図　ＳＫ９Ⅱ層遺物出土状況図（1：40）



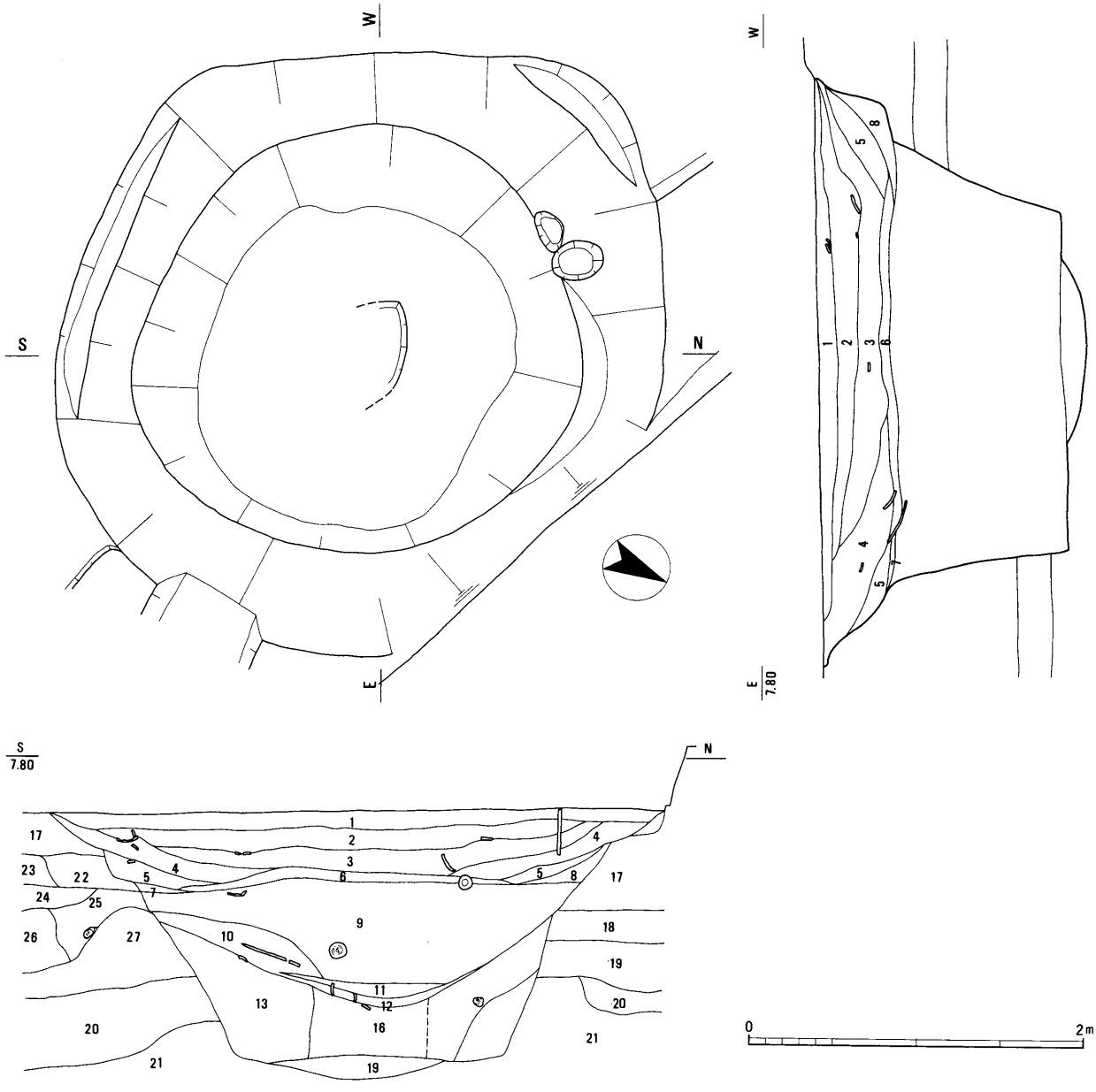
第９図　ＳＫ９Ｉ層土器出土状況図（1：40）

取り上げたが、この黒色土部分がまとまり、遺物を多く包含することから、この黒色土部分をＳＺ４と判断した。ＳＺ４以前か伴うと思われるピットが確認されることから竪穴住居の可能性も考えられる。ＳD11を切っており、より新しい。ＳＫ９　Ｉ層とほぼ同時期の遺構と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ59（第12図）　ｋ－２～ｍ－３で東側のみ確認した２間以上×５間の建物である。方向は約45°ｗを向き、柱間は北から2.0m、1.8m×４、東西は1.6mである。条里地割の方向とは合わず、方形周溝墓の方向に沿うことから、自然地形に規制された、条里地割の施工に先行する遺構の可能性がある。

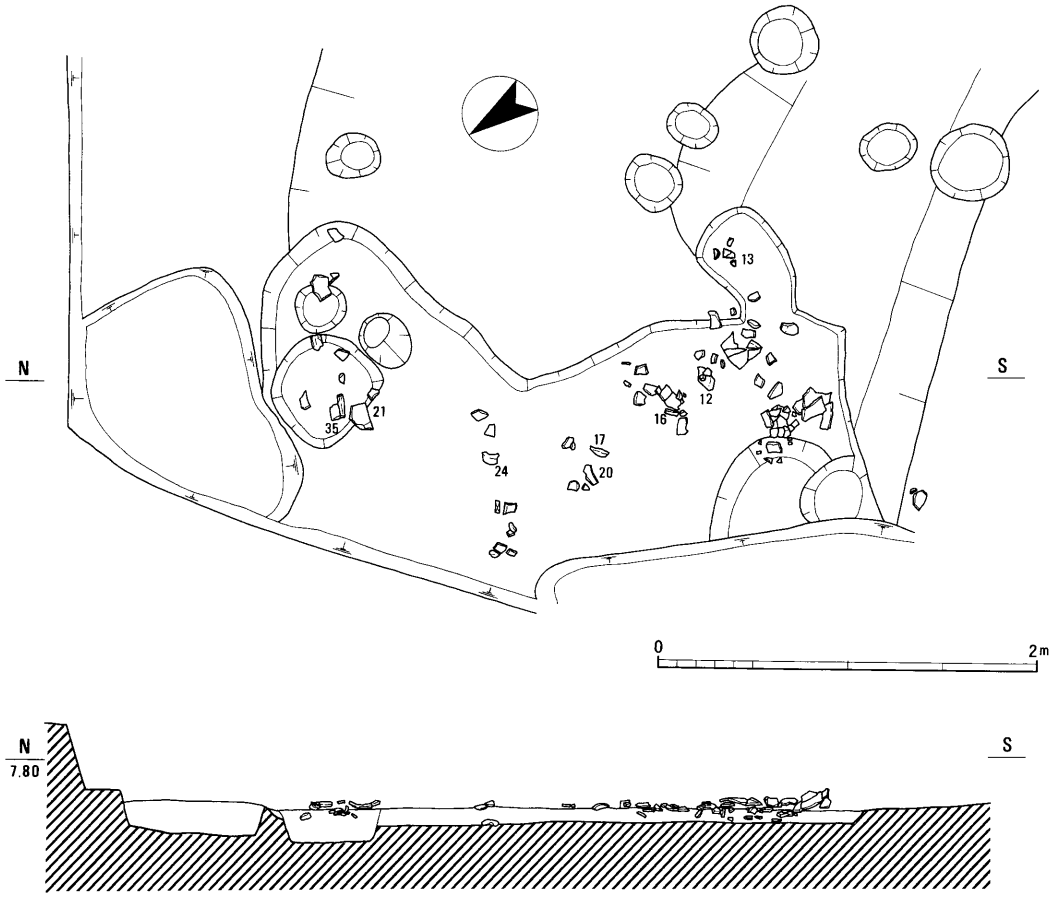
掘立柱建物ＳＢ60（第13図）　ｐ－０～ｑ－２で確認した南北３間以上の建物である。南端のピットは切り合いが見られる。柱間は北から1.9m×３である。周辺にはピットが多く見られるが、小型のものが多く、建物としてまとめることはできなかった。調査区外に広がるものと考えられる。ＳD29とほぼ同様の埋土であったため切り合い関係を捉えることはできなかった。

また、ピットは確認できたが建物としてまとまらなかったものも多く存在する。方形の大型の掘形を持つピットもいくつか検出されており、試掘調査でも確認されていることから掘立柱建物が更に数棟存在すると考えられる。



Ⅰ層
1　灰褐色粗砂混じり砂質土（炭・焼土混）
2　灰褐色粗砂少量混じり砂質土（炭・焼土混）
3　灰褐色砂質土（マンガン粒含む、炭・焼土混）
4　褐灰色粘質土（マンガン粒含む）
5　褐灰色粗砂混じり粘質土
6　明黄褐色粘土
7　橙色砂質土（鉄分）
8　灰色砂質土（鉄分含む）
Ⅱ層
9　灰色粘土（有機質含む）
10　灰色粘土（橙色砂混じり、有機質含む）
11　灰色粘質土
12　オリーブ黒粘質土（有機質土）
Ⅲ層
13　灰色粘質土（オリーブ灰色細砂ブロック状に含む）
14　灰色粘質土
15　灰色粘質土（緑灰粘質土ブロック状に含む）
16　暗オリーブ灰色粘質土
17　淡黄色砂質シルト
18　明黄褐色粘質土
19　青灰色粘質土
20　青灰色粘質土（灰色粗砂混じる）
21　灰色砂（流木あり、湧水層）
22　灰黄色シルト
23　灰褐色シルト質粗砂
24　灰褐色粗砂
25　灰色細砂（流木混じる）
26　鈍い褐色粗砂（灰色シルトがラミナ状に混じる）
27　黒褐色粗砂（有機質含む）

第10図　ＳＫ９平面図・土層断面図（1：40）



第11図　ＳＺ４遺物出土状況図（1：40）

ＳＤ11・29　調査区の北側で検出した溝である。拡張調査区のＳＤ29と繋がるものと思われる。自然流路ＳＤ19を切っており、自然流路の可能性もある。ＳＺ４やＳＫ９に切られており、先行する遺跡である。田辺編年ＴＫ209併行と思われる須恵器杯身や、土師器杯などが出土しており飛鳥時代の遺構と考えられる。条里地割に乗る形で確認される溝である。

条里地割に沿う溝

今回の調査では幅は狭く繋がりは不明であるもののほぼN30°Ｅに近い方向をし、平行する溝が数条確認されている。ＳＤ11・29の幅広い溝の他、ＳＤ17、ＳＤ16、ＳＤ15、ＳＤ23、ＳＤ27、ＳＤ28、ＳＤ43、ＳＤ36、ＳＤ39、ＳＤ47、ＳＤ58、ＳＤ49、ＳＤ51、ＳＤ55がある。比較的距離が狭く平行に並ぶ溝ＳＤ27・28・43やＳＤ36・39・47、ＳＤ58・49は道路の側溝とも考えられるが、狭い調査区のため断定はできない。いずれも幅は0.4～0.9m、深さ0.2m前後で規模の狭い溝である。遺物はほとんど出土せず、土師器・須恵器の小破片が見られる程度である。

条里に伴わない溝

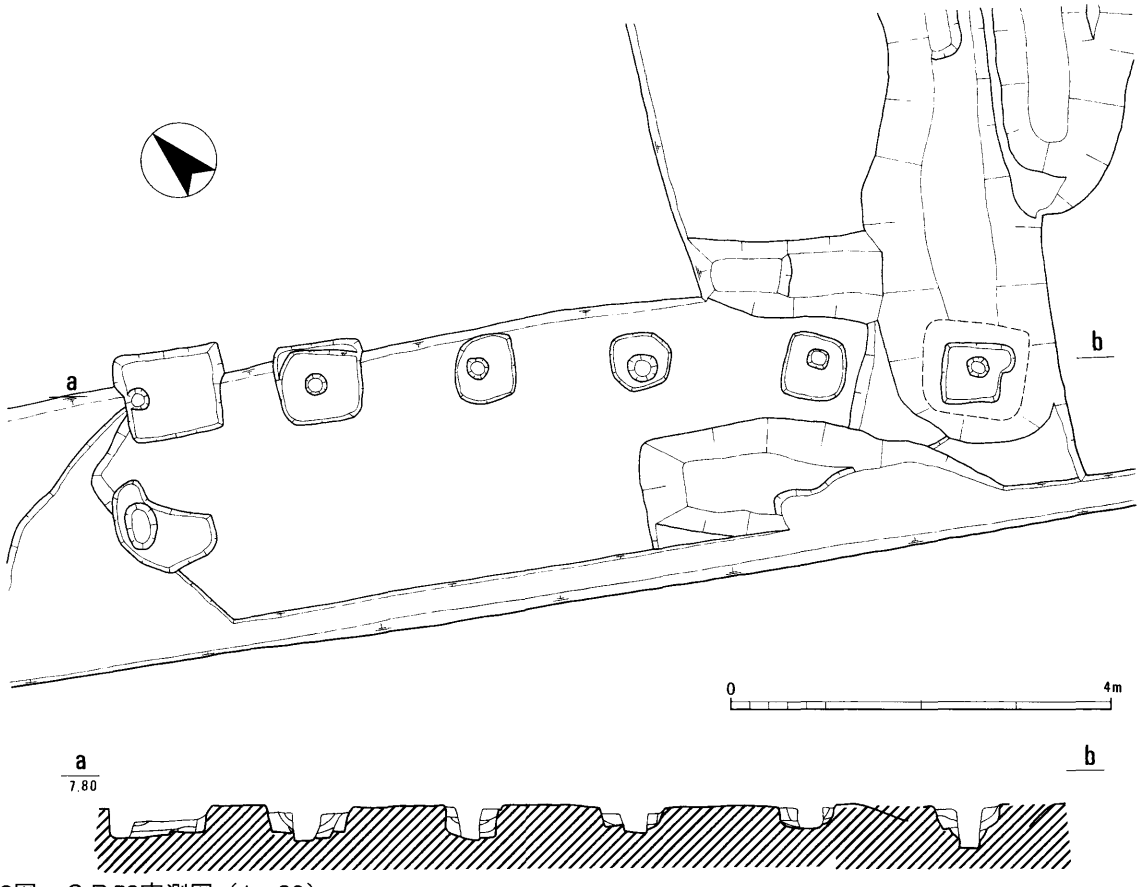
ＳＤ26、ＳＤ40、ＳＤ38がある。条里に沿う溝との切り合い関係は調査区内では見られない。ＳＤ26・40は約N10°Ｗ、ＳＤ38は約25°Ｗの方向を向くが調査区内ではやや蛇行しており、平行する溝の可能性もある。ＳＤ41から田辺編年のＴＫ209～217と思われる須恵器が出土しているため、条里に沿う溝より古い遺構であると考えられる。

ＳＤ50・53

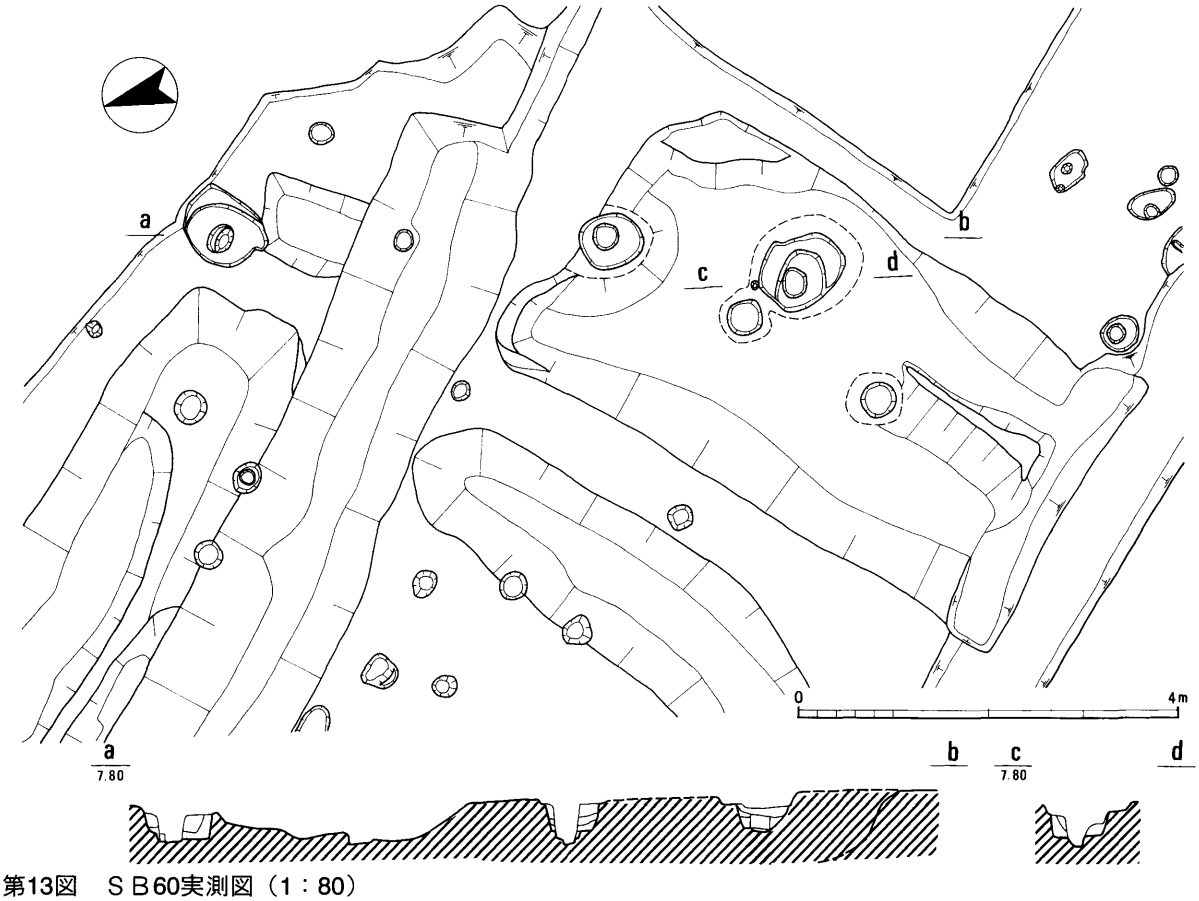
南西調査区で確認した。自然流路と思われ、土師器・須恵器の小破片が多く出土し、中世の遺物破片も含まれている。

その他

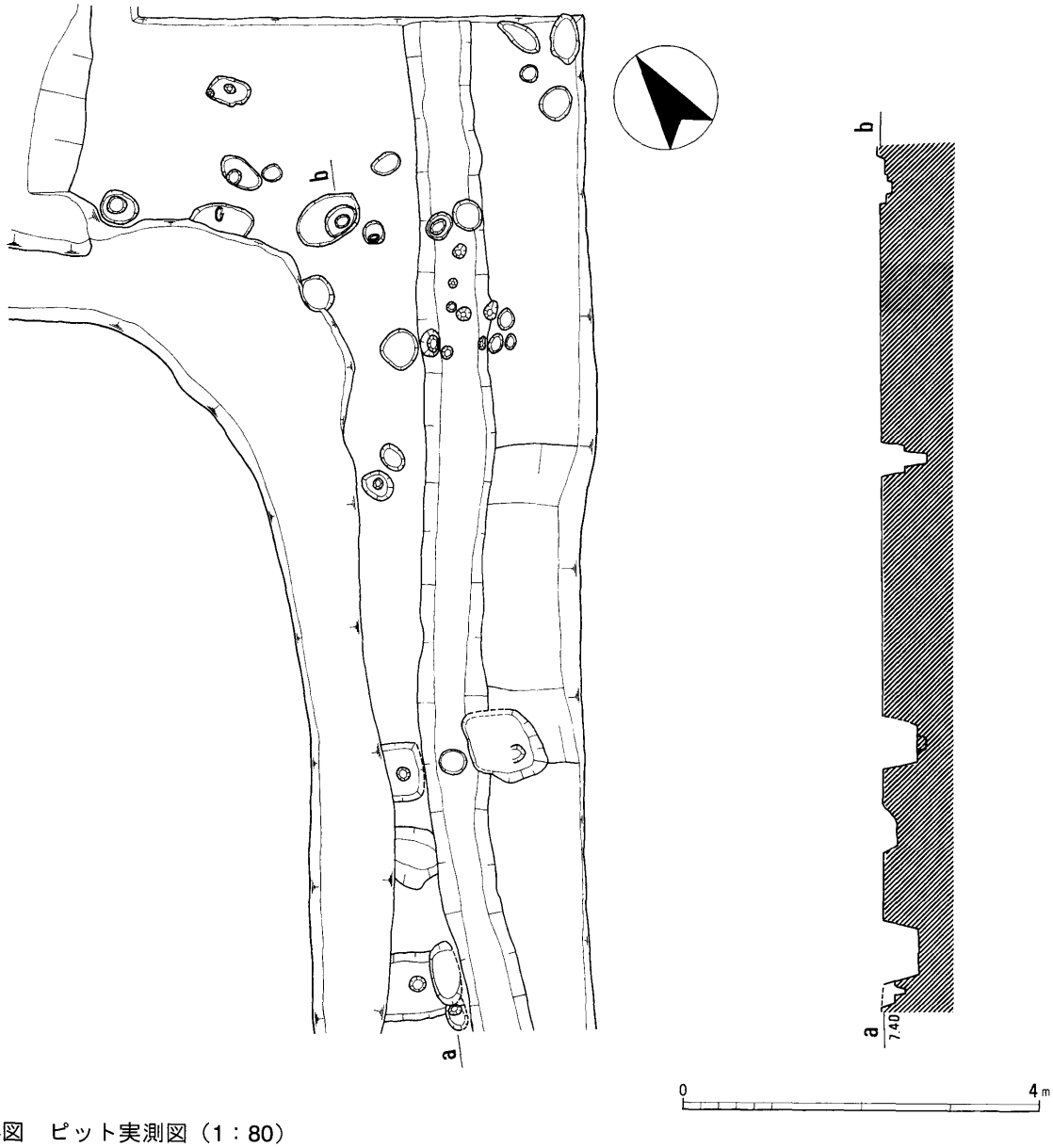
立命館大学青木哲哉氏の御教示により３ヶ所で断ち割り調査を行っている。土層断面は第15図のとお



第12図　ＳＢ59実測図（1：80）



第13図　ＳＢ60実測図（1：80）



第14図　ピット実測図（1：80）

りである。１はＳＤ19の断ち割り、２はＳＢ59西側の流路、３はコーナー部ＳＤ25の断ち割りである。ここでは概要のみを示し、詳細については別稿を用意する予定のためそちらを参照されたい。

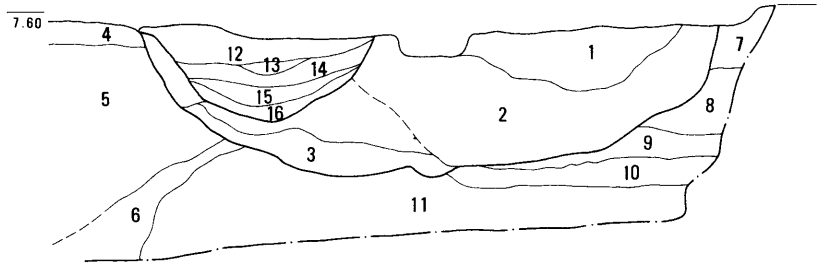
１では７・８・９は比較的安定したシルトで微高地を形成するものである。自然流路であるＳＤ１９はこれを切って存在し、南側は更に古い流路となっている。

２は８が自然堤防の本体であり、安定した微高地は形成されず、自然流路となっている。１・２がＳＤ19に繋がる自然流路である。

３は６の青灰色シルト混じり細砂が自然堤防の本体であり、２～５が乗り微高地を形成する。14～17は遺跡形成時の自然流路であり、７～13（ＳＤ２５）はＳＤ19に繋がる自然流路と考えられる。

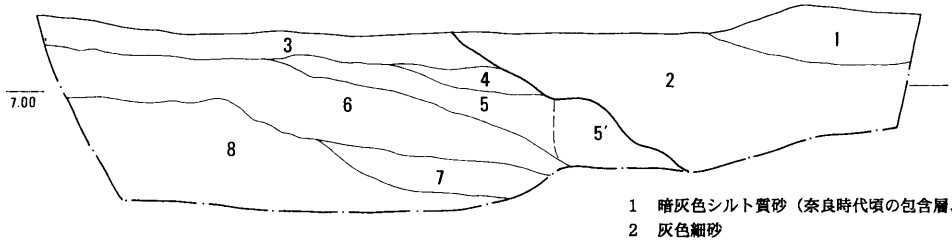
ＳＤ19などの弥生時代中期に埋没する自然流路以前の流路については年代測定の結果が出ておらず不明である。

ＳＤ11・19断ち割り図



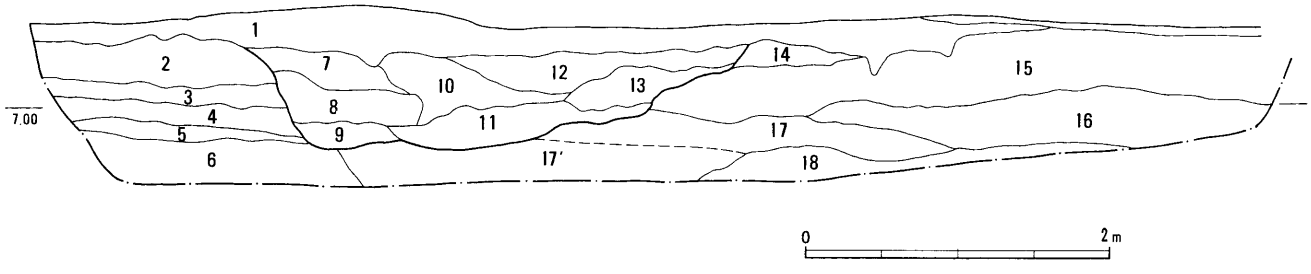
1　褐灰色砂（両端で砂質シルト）
2　灰褐砂（左端で灰色の砂質シルト、右端で黄褐色のシルト、流水のラミナ）
3　暗青灰シルト質砂（1 cm 以下のレキが若干混入）
4　褐灰色砂質シルト
5　にぶい黄褐色砂（木片混入、流水のラミナ）
6　青灰色シルト
7　黄褐色砂質シルト（検出面）
8　黄褐色シルト
9　青灰色シルト
10　青灰色細砂混じりシルト（細砂はレンズ状に混入）
11　青灰色細砂（シルトのレンズが混入）
12　にぶい褐色砂質シルト
13　灰褐色砂質シルト（12よりやや粘質）
14　灰白色シルト
15　灰白色細砂
16　黄灰色シルト
（1～3：SD19 埋土、12～16：SD11 埋土）

ＳＢ59西側断ち割り図



1　暗灰色シルト質砂（奈良時代頃の包含層、遺構埋土）
2　灰色細砂
2　灰褐色砂レキ（グラニウル主体、マトリックスは粗砂）
3　黄褐色細砂質シルト（検出面）
4　灰白色シルト（鉄分含む、橙色）
5　灰色細砂質シルト
5　灰色細砂（木片混入）
6　灰色シルト（鉄分含む、木片混入）
7　青灰色シルト質砂
8　青灰色細砂（シルトが混入）
（2、2　：SD19 と同じ流路埋土）

ｒ・４～ｒ・６断ち割り図



1　暗褐灰色細砂混じりシルト（奈良時代頃の包含層、遺構埋土）
2　黄褐色細砂混じりシルト（検出面）
3　黄褐色細砂質シルト
4　黄褐色シルト
5　黄褐色細砂質シルト
6　青灰色シルト混じり細砂（自然堤防本体）
7　灰褐色細砂質シルト
8　暗褐灰色細砂混じりシルト
9　橙灰色シルト
10　灰褐色シルト質細砂
11　暗灰色シルト（腐植物混入）
12　灰褐色細砂混じりシルト
13　暗褐灰色細砂混じりシルト
14　黄褐色細砂質シルト
15　灰色シルト混じり細砂
16　灰褐色レキ混じり粗砂
17　灰色シルト質細砂
17　青灰色シルト質細砂
18　灰色粗砂
（7～13：SD23 埋土）

第15図　調査区断ち割り土層断面図（1：50）

惣作遺跡Ａ地区遺構一覧表

遺構番号	性格	時期	小地区	規模	形状	特記事項
SD1	溝(流路)		A6	幅(2.2m)、深さ0.4m		遺物小破片のみ
SD2	溝(流路)		A7	幅2.4m、深さ0.6m		遺物小破片のみ
SD3	溝		A3	幅0.5m、深さ0.2m		

惣作遺跡Ｂ地区遺構一覧表

遺構番号	性格	時期	小地区	規模	形状	特記事項
SZ4	落ち込み	奈良・平安	abc-0,1	深さ0.1m	不整形	奈良～平安時代の土師器・須恵器多量、黒色土として取上げ
SD5	流路	弥生	a-2	幅0.6m、深さ0.1m		
SD6	流路	弥生	a-2	幅0.5m、深さ0.1m		
SD7	流路	弥生中期	b-2	幅0.5m、深さ0.1m		
SK8	土坑		a-0	深さ0.1m	円形	浅い落ち込み
SK(SE)9	土坑・井戸	奈良・平安	b・c-0	深さ1.6m	隅丸方形	下層は井戸、上層は土坑。土師器・須恵器多量
SD10	溝			幅0.7m、深さ0.2m		SK9に付属
SD11	溝	飛鳥	b・c・d-1	幅1.8m、深さ0.7m		自然流路か。奈良時代の遺構に切られる。
SD12	溝	弥生中期	n-2	7.4×2.0m、深さ0.7m		方形周溝墓南溝
SD13	溝	弥生中期	p-2	5.6×1.4m、深さ0.5m		方形周溝墓東溝
SD14	溝		m-2	幅1.4m、深さ0.3m		
SD15	溝	奈良・平安	r-2～6	幅0.8m		条里の溝か
SD16	溝		g-2	幅0.8～1.2m、深さ0.2m		
SD17	溝	奈良・平安	d-2	幅0.7m、深さ0.15m		条里の溝か
SK18	土坑？		e-2	不明		落ち込み
SD19	流路		b-1	幅4.0～5.5m		
SK20	土坑		c-2		円形	弥生土器出土、SD5を切る
SD21	溝	弥生中期	m-2	(7.0)×1.6m、深さ0.6m		方形周溝墓、SD12・13・21・31
SD22	溝		l-3	幅0.8m、深さ0.3m		方形周溝墓に切られる
SD23	溝		r-3	幅3.6m、深さ0.6m		方形周溝墓か
SD24	溝		p・q-1・2	幅3.0m、深さ0.5m		2条切り合い、方形周溝墓か
SD25	溝		r-4	幅0.8m、深さ0.2m		条里の溝か
SD26	溝		r-8・9	幅0.4m、深さ0.2m		SK45に切られる
SD27	溝		s-8・9	幅0.6m、深さ0.25m		条里の溝か
SD28	溝		s-8・9	幅0.4m、深さ0.2m		
SD29	溝	飛鳥	l・1～q・1	幅1.7～2.2m、深さ0.5m		SD11と同じ溝
SK30	土坑		m・n-0	1.7×0.5m、深さ0.2m	楕円形	SD31を切る
SD31	溝	弥生中期	m-0～o-0	10.8×2.6m、深さ0.6m		SD33と同じ、方形周溝墓、2条切り合いか
SD32	溝	弥生中期	m-1・2	(4.8)×1.6m、深さ0.6m		方形周溝墓
SX33	方形周溝墓	弥生中期		8.4×5.2m	長方形	方形周溝墓
SK34	土坑		a-0	深さ0.3m		撹乱か
SK35	土坑	奈良・平安	w-9	2.3×0.9m、深さ0.15m	楕円形	炭・焼土が多く含まれる、埋土下でピット検出
SD36	溝	奈良・平安	y-9	幅0.9m、深さ0.1m		下からピット多数検出、条里の溝か
SK37	土坑		w・x-9	3.6×0.2m、深さ0.2m	楕円形	落ち込み
SD38	溝		v・w-9	幅0.5m、深さ0.15m		SD58と同じ溝
SD39	溝		y-9			条里の溝か
SD40	溝	飛鳥	u・v9	幅1.5m、深さ0.55m		流路か
SK41	土坑	飛鳥	t9・u9	2.70m、深さ0.2m	楕円形	落ち込み
SD42	溝		p-0・1	2.8×0.9m、深さ0.4m		SD24. SD29に切られる、方形周溝墓か
SD43	溝		t-9	幅0.9m、深さ0.2m		条里の溝か
SK44	土坑	弥生中期	r-6	長1.2m、深さ0.5m	円形	SD15に切られる。弥生土器出土。
SK45	土坑		r-8・9	径1.2m、深さ0.25m	円形	
SK46	土坑	弥生か	t-9	0.7×0.4m、深さ0.1m	楕円形	底部穿孔の弥生土器出土
SD47	溝		ア－8	幅0.6m		条里の溝か
SD48	流路		ア－8	幅0.4m、深さ0.2m		埋土粗砂
SD49	溝		ア・イ－10	幅0.6m、深さ0.2m		条里の溝か
SD50	流路		イ10～イ12			
SD51	溝	奈良以降	イ12	幅0.8m、深さ0.3m		SD50を切る
SK52	土坑		イ・ウ-12	3.2m、深さ0.3m		撹乱か
SD53	流路		イ-13～			SD50上層、土器小破片包含
SD54	溝		イ-13～	幅0.5m、深さ0.15m		新しいか
SD55	溝		エ-17	幅0.5m、深さ0.2m		流路肩
SK56	土坑		オ-18	径1.3m、深さ0.3m	円形	井戸か
SD57	溝			幅0.5m、深さ0.15m		条里溝か
SD58						SD38と同じ
SB59	掘立柱建物	飛鳥・奈良	k-2～m-2	東西5間、南北2間以上		
SB60	掘立柱建物	飛鳥・奈良	p-1・q-2	南北3間以上		SD29との切り合い不明

第３表　遺構一覧表

3　出土遺物

Ａ地区からは弥生中期と思われる小破片が出土しているが、図示できるような遺物は出土していない。Ｂ地区からは弥生土器、飛鳥・奈良後期～平安時代初頭の須恵器・土師器等の遺物が整理箱にして約60箱出土している。中でもＳＫ（ＳＥ）９からは８世紀後葉～９世紀初頭にかけての良好な一括資料を得ることができた。以下、主なものについて述べる。詳細については遺物観察表を参照していただきたい。

方形周溝墓（ＳＸ33）出土遺物（１～３）

１・２・３は方形周溝墓の溝底から出土している。１は壷で、上部からクシ状工具による簾状文・横線文5段・波状文が施される。内面はオサエ後ハケメ調整され、爪の跡が多く残っている。３の甕は内外面とも煤が付着しているが、内面の煤は底部から５cmほど上から付着している。

土坑・流路・試掘坑出土遺物（４～10）

４の壷はミガキの後クシ状工具により横線文が施され、後上部に波状文を施している。５・６・７は甕の底部、８は壷の底部である。５は底部に焼成前の穿孔が見られる。10は口頸部に２条の突帯を巡らせ、貝殻刺突を施している。体部はハケメ後ミガキ調整を行い、体部上部には２段×３の沈線を施し、体部最大径部にも1条の沈線を施している。

ＳＺ４出土遺物(11～30)

11～13は須恵器杯蓋である。いずれも肩が張り、口縁端部を下方に折り曲げるものである。11にはボタン状のつまみ、12は扁平なつまみがつく。13にも12と同様のつまみがつくと思われる。

15は須恵器の有台の杯身である。口縁端部がやや肥厚する。

16～18は土師器の杯である。16は外面をオサエ後ナデ調整し、口縁端部外面をヨコナデして面を持つ。17・18は口縁端部が外反する。18は外面にミガキが見られる。

19・20は土師器の皿である。外面は剥離のため不明瞭である。ともに口縁端部内面がヨコナデされ、19は面を持ち、20は沈線が巡る。

21は須恵器の盤と思われる。

22・23は土師器の甕である。口縁端部は強くヨコナデされ面を持ち、上方につまみあげられる。

24は土師器甑。25・26は把手のつく土師器甕で、26はミニチュアである。

27～29は土錘。球形のものは29のみである。

ＳＫ９Ｉ層出土遺物（31～107）

奈良時代後期～平安時代初頭と思われる土器群である。

31～33は須恵器杯蓋である。31・33は扁平な、32は擬宝珠状のつまみがつく。31はやや大型で器高が高く、直線的に伸びる。32は器高が低く扁平な形状をし、33は歪みがあるが肩部が張るものである。

須恵器の杯身は有台のもの（34～39、41、44、45）と無台のもの(40・42・43)がある。有台杯身には法量的には17cm前後のもの（34・35）と13cm前後のもの（36～39、41・44・45）がある。いずれも体部と低部の境が明瞭で、箱型を呈している。39は口縁部内面をヨコナデして面を持つ。44の底部には「大厨」、45の底部には「色・・」の墨書が見られる。無台の杯は箱状のもの（40・42・46）と椀状をした丸みを持って立ち上がるもの（43)がある。46は土師質に近い焼きをしているものの、調整が須恵器杯と同様であることから須恵器と判断した。

47～70は土師器の杯である。表面が剥離しているため、調整が不明瞭なものが多い。形はバラエティーがある。47・48は断面弓状のものである。48は口縁端部を内外面ともヨコナデし、端部が外反する。

49～66は口径約12.0～14.0cm前後のものである。49は体部と口縁部の境が明瞭でなく、丸味をもっている。

50～55は口縁部が外方に直線的にあるいはやや外反して開くもので、口縁部と底部の境は明瞭である。50は内面に面を持つ。56・58・59は端部まで内彎気味に立ち上がり、内面に面を持つ。

57・60～65は口縁端部が外反するもので、61・65は口縁部の立ち上がりが直線的である。57・62の外面にはミガキの痕跡が残っている。63の底部には「十」の墨書が見られる。64は口縁端部の外反が強

い。66は底部が丸く底部と体部の境が明瞭で口縁部が外反する。外面はミガキ、内面には放射暗文と螺旋暗文が見られる。

67は径15.0cmの中型のもの。口縁部の立ちあがりは直線的で、端部は外反する。外面はミガキ調整され、内面には放射暗文と螺旋暗文が見られる。

68～70は径16.5～17.5cmのやや大型の杯である。68は口縁端部が外反し、69・70は内彎気味で端部が丸くおさまり、69は端部がやや肥厚する。69・70は外面は細かくミガキがされ、70の内面には放射暗文が見られる。

71～75は土師器の皿である。71は外方に口縁部が延びるもの、72～75は内彎気味に立ち上がるものである。72の口縁端部内面は面を持ち、73・74は端部が肥厚する。75の内面には螺旋暗文が見られる。

76は須恵器の杯である。焼きが悪く、土師器に似た色調である。口縁部は強く外反する。

77は土師器杯、78は土師器皿である。ともに外面ミガキ調整で口縁部をヨコナデし、口縁端部内面には沈線が巡る。77は放射暗文・螺旋暗文が施され、78は螺旋暗文が施される。77の外面底部には「大（？）厨」の墨書がある。

79は黒色土器である。A類に含まれる。口縁部のみの出土であるため、杯状になるか椀状になるか不明である。内外面とも細かなヘラミガキが見られ、黒色範囲は外面口縁部まで見られる。

80は志摩式製塩土器である胎土は粗く、被熱により剥離が著しい。

81～84は土師器の高杯である。81・82は長脚、83・84は短脚である。83・84の裾部は内面がヨコナデされ、端部は尖り内彎しておさまる。81～83は面取りがされるが、磨耗により不明瞭である。

85～87は土師器の甕である。85は口縁端部がつまみ上げられ、凹線状になる。86は体部内外面ともハケメ調整で、口縁端部は丸く収められ、内面がナデにより面を持つ。87は調整不明瞭であるが、体部下半に穿孔が見られる。

土師器の鉢には強く外反するもの（88）と、直線的に開くもの（89・90）が見られる。88は胎土が密で、細かなミガキ調整が施されている。口縁端部に向けて強く外反し、端部は強くヨコナデされ肥厚する。89・90は表面が剥離しているため調整は不明瞭であるが、90にはミガキの痕跡が若干残っている。89は口縁端部は面を持つが、90は端部を丸くおさめている。

91は須恵器の短頸壷である。体部は肩が大きく張り、口縁部は内側に短く立ち上がる。

92は須恵器の鉢である。内部には漆が残っており、漆入れの容器として使われたものと思われる。大きく肩の張る体部から屈曲した口縁部が外反して延び、口縁端部は凹線状に面をなしている。

ＳＫ９Ⅱ層出土遺物（105～129）

105～113は土師器の杯である。105は断面が弓状を呈する。106～109は口縁部外面が２段ないし３段ヨコナデされる。109は口縁部が外反し、口縁端部内面には沈線が巡る。110～112はやや大型の杯で、口縁部が内彎気味に立ち上がり、端部は外反する。112は内面端部が面状になる。110・112は外面を丁寧にみがいている。111の内面には放射暗文が見られる。113は精緻なつくりで白っぽい胎土であり他の土師器とはやや異質な感じを受ける。外面のミガキは丁寧で、内面の放射暗文は５本１単位で入れられ、あたり痕が残る。底部外面にはヘラ記号がある。

114～117は土師器の皿である。115は口縁部が直線的である。116・117は内彎気味に立ち上がり、口縁端部内面に沈線が巡る。116は内外ともミガキ調整され、内面に螺旋暗文が見られる。

118は土師器の高杯である。器高は低く脚部は面取りがされる。裾部端部は強くヨコナデされ、下方に突出する。

119・120は須恵器の高杯である。120は補修のためか漆と思われる付着物が割れ口に見られる。

121～123は土師器の甕である。121は摩滅のため不明瞭であるが、いずれも体部外面はハケメ、下半部はケズリ調整であり、内面上部はハケメ調整される。口縁端部はヨコナデでされ、ややつまみ上げ状となる。

124～126は土師器の鉢である。大きさは異なるが形・調整は類似する。いずれも口縁部にかけて強く外反し、口縁端部は強いナデによって肥厚してい

る。内外面ともにミガキ調整が施される。

127・128は曲物の底と思われる木製品である。127は側面に、128は上からの釘の痕跡が残る。

129は砥石である。凹面だけでなく４面ともに使用された痕跡が残る。

ＳＫ９Ⅲ層出土遺物（130～140）

131～134は斎串である。135はただの板状を呈しているが、同様の意味を持って埋められたものと考えられる。斎串はいずれも上端を圭頭状に、下端を剣先状にしており、134は状態が悪いためはっきりしないが、側面の左右１ヵ所に切り込みを入れるもので、『木器集成図録－近畿古代篇－』のＣⅢに当てはまる。

土師器甕はそれぞれ形態差が見られる。外面は粗いハケメの後細かいハケメを施し、137～140は下半をケズリ調整する。136は内面上部、137・140は口縁部内面に横方向のハケメが見られる。口縁端部は136は丸く収められ、136～139は端部がヨコナデされて面を持ち、138・139はつまみ上げ状になる。140はヨコナデにより口縁端部が外側に突出する。

溝出土遺物（141～166）

141～143・145・146は須恵器の杯身である。受け部は内傾して立ち上がる。146は底部が平らで扁平である。田辺編年のＴＫ209～217に併行するものと思われる。

148は粗製の土師器椀である。底部は平らで緩やかに内彎している。

147は土師器の高杯である。長脚でわずかに面取りしているが、磨耗のためはっきりしない。

149～153は土師器の甕である。149・150は外面縦方向のハケメが施され、150は口縁部内面にもハケメが見られる。口縁端部はつまみあげられる。151は体部外面に横方向のハケメを施す。口縁端部を強くヨコナデし、沈線が巡る。152は屈曲せずにやや外反して立ち上がる口縁をもち、内外ともハケメ調整される。

154は土錘と思われるが、未製品なのか、穿孔されていない。

155・156は土師器の皿である。口縁部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。

157の土師器皿は口縁端部内面がナデられ、強く外反する。

159の土師器甕は、外面粗いハケメの後細かいハケメを施し、下半部をヘラケズリしている。内面は工具によるナデが見られるが、ハケメはない。口縁端部内面がヨコナデされ、外側に突出する。160は口縁部が外側に屈曲する甕である。

161～165は土錘である。163は165のように作った後片側を平らに削っている。

ピット出土遺物（167～170）

調査区内では多数のピットが見つかっているが、遺物はほとんど出土しておらず、図示できるものは４点のみである。167・168は土師器の甕である。167は口縁端部ヨコナデにより内面に巻き込まれ、上方に面を持つ。168はヨコナデによりつまみ上げ状になる。169は須恵器の有台杯身で、体部は箱型である。170は土師器の杯で、底部は平らで口縁部に直線的に開く。底部と体部の境は明瞭である。

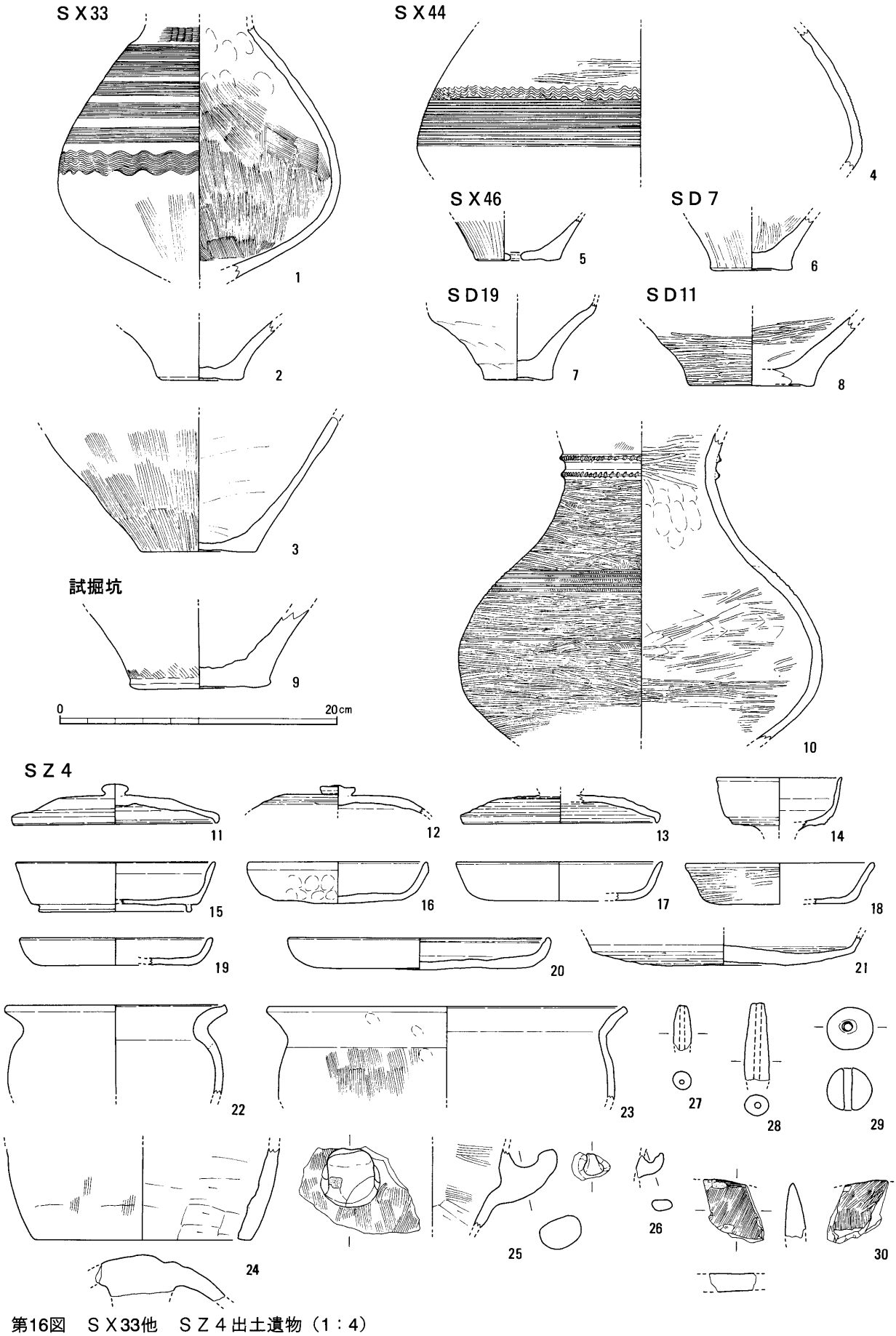
試掘坑出土遺物（172～174）

古代の土器として図示できるものは３点のみである。172は志摩式製塩土器、173は土師器の杯、174は須恵器の壷である。174は肩部が刺突が見られる。

遺物については、以下の文献を参照した。

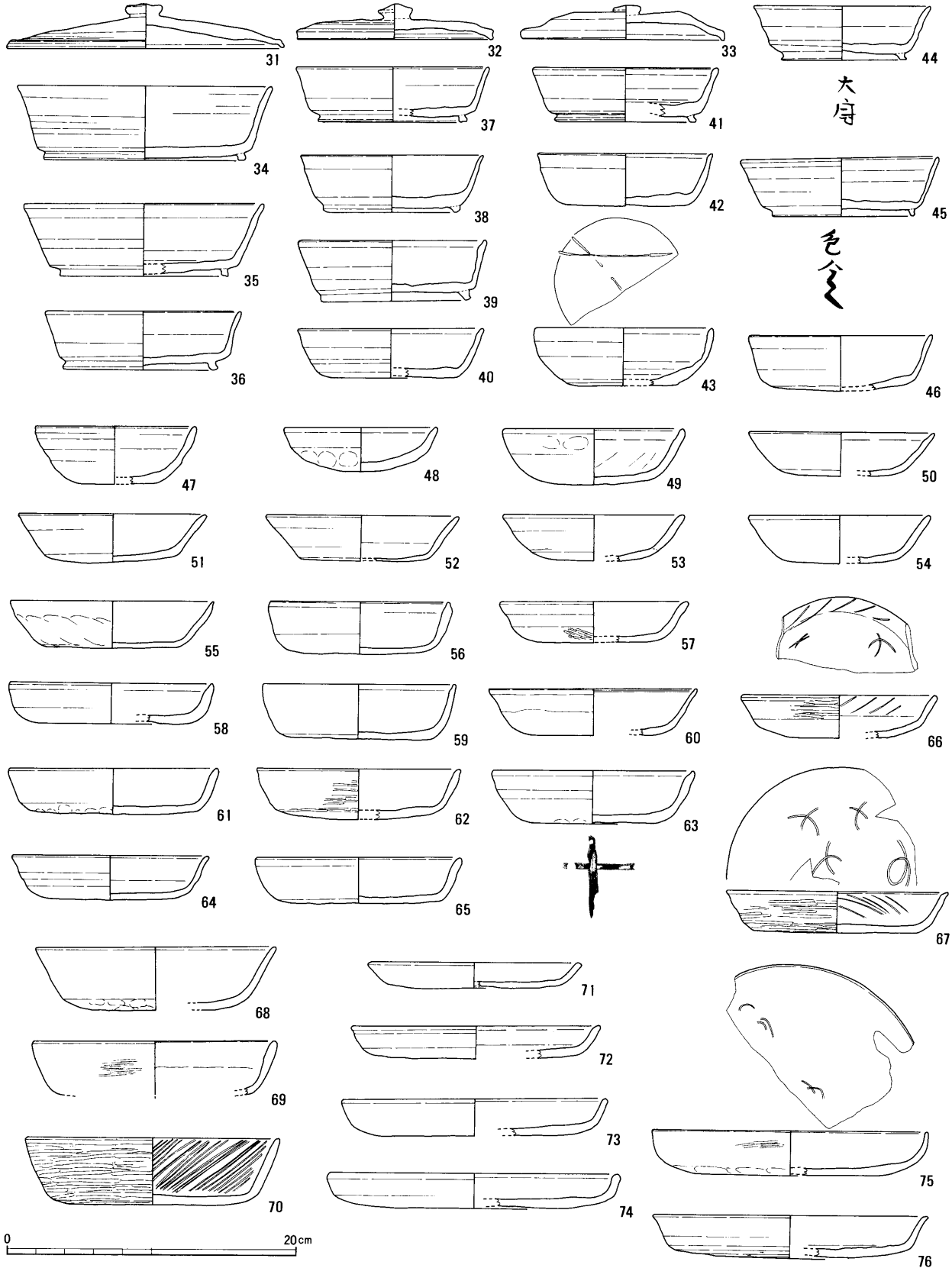
・城ヶ谷和弘「尾張における７世紀から９世紀半ばの須恵器～猿投窯とその周辺～」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西東２　須恵器－』古代の土器研究会　1993年）
・「斎宮の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』三重県教育委員会　三重県斎宮跡調査事務所　1985年）
・田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）
・『古代の土器Ⅰ』（古代の土器研究会　1992年）
・伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古代の土器」（『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001年）
・上村安生「伊賀・伊勢における古代土師器煮炊具の様相（『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996年）
・奈良国立文化財研究所『木器集成図録－近畿古代編－』1985年

墨書については、斎宮歴史博物館榎村寛之氏より御教示を得た。



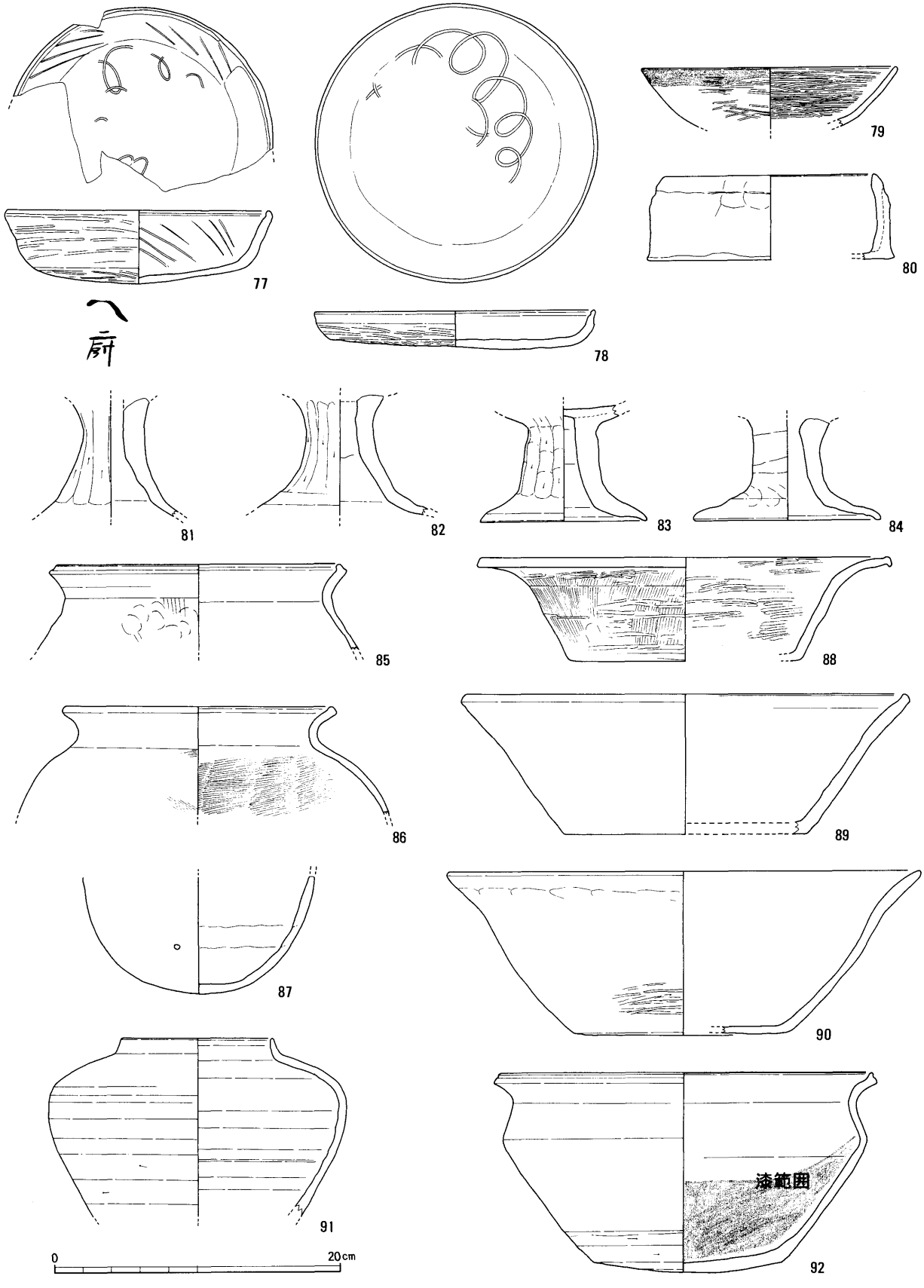
第16図　ＳＸ33他　ＳＺ４出土遺物（1：4）

ＳＫ９Ｉ層

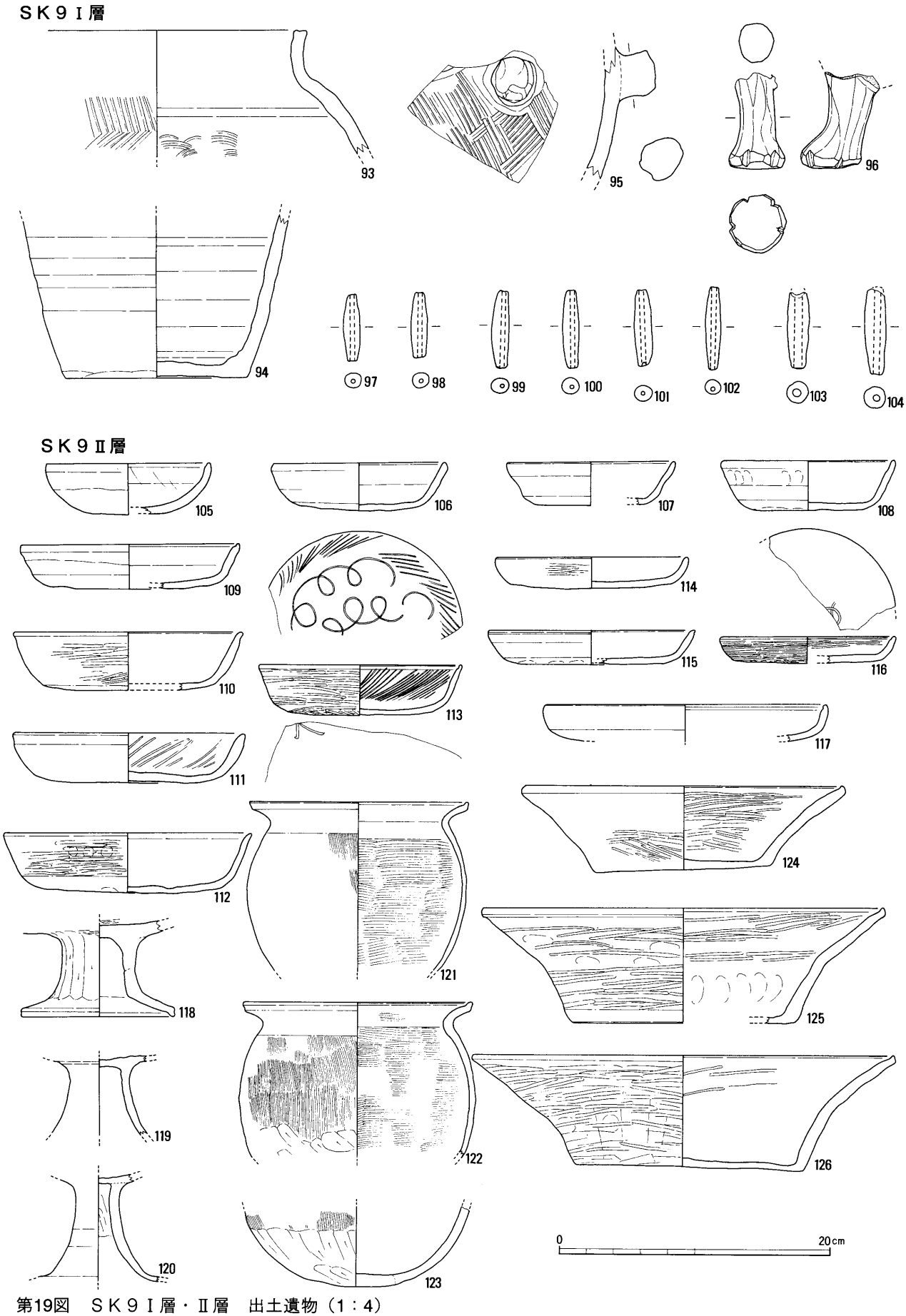


第17図　ＳＫ９Ｉ層出土遺物（1：4）

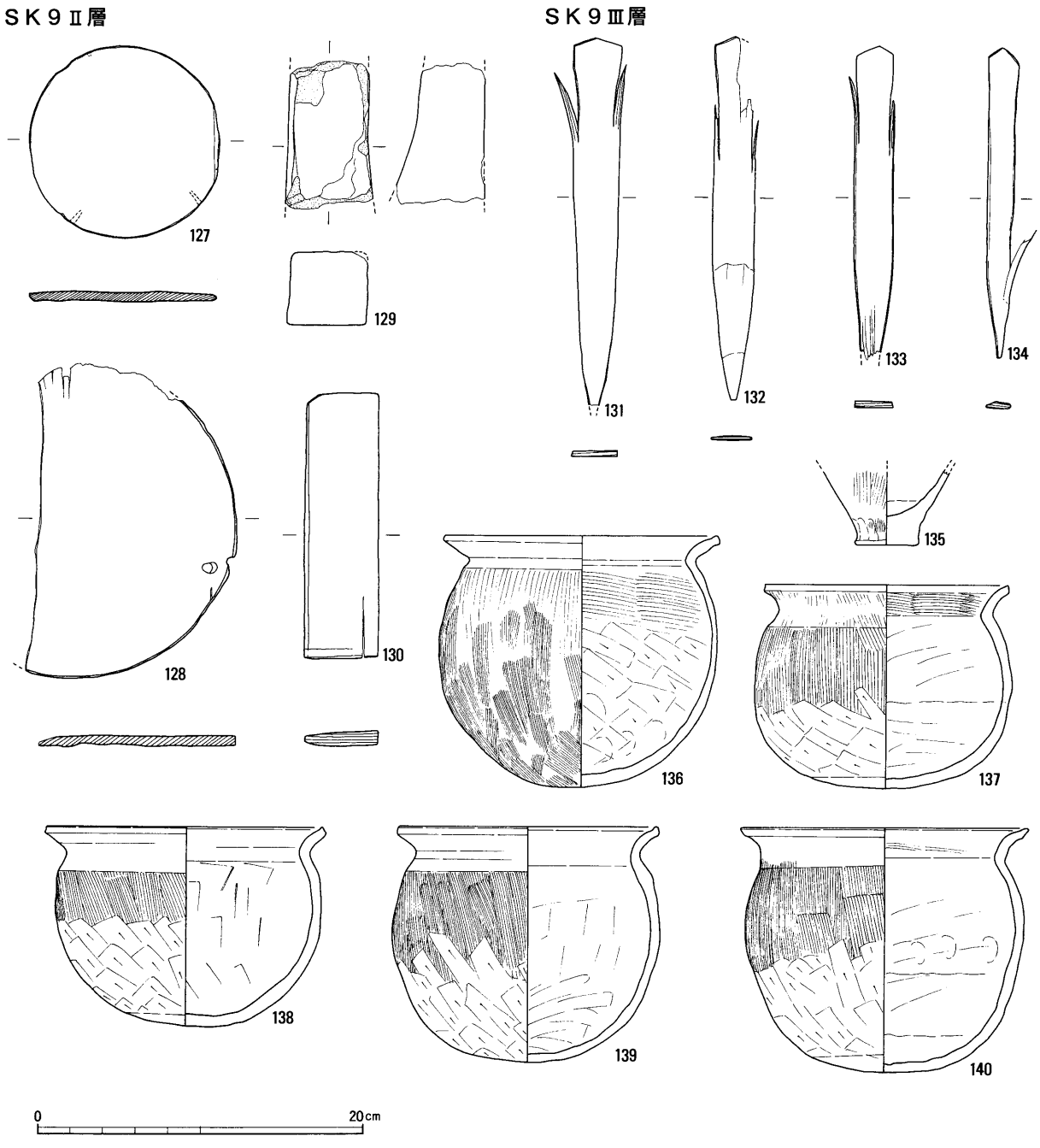
ＳＫ９Ｉ層



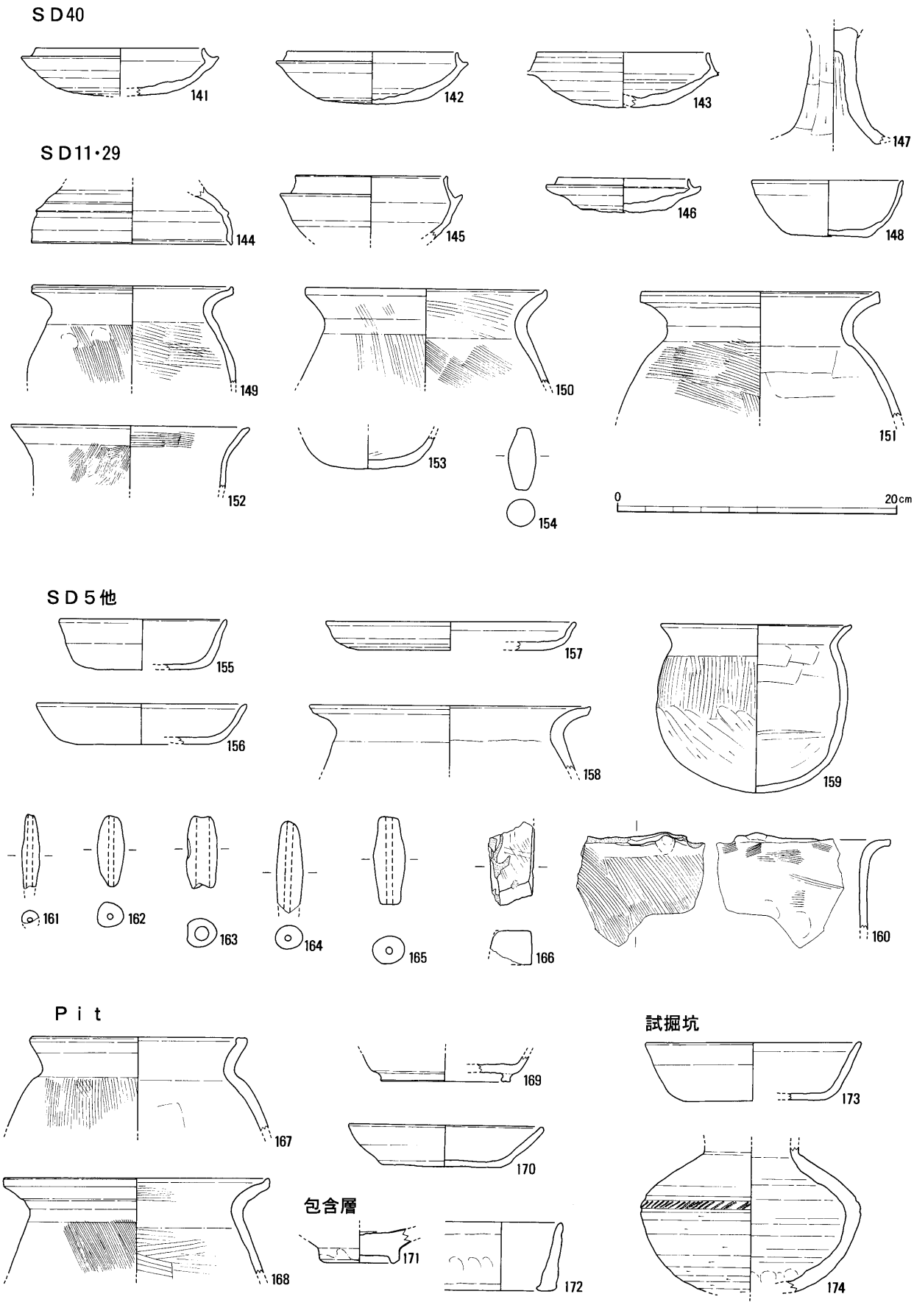
第18図　ＳＫ９Ｉ層出土遺物（1：4）



第19図　ＳＫ９Ⅰ層・Ⅱ層　出土遺物（1：4）



第20図　ＳＫ９Ⅱ層・Ⅲ層　出土遺物（1：4）



第21図　ＳＤ40, 11・29, ＳＤ51他　出土遺物（1：4）

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
1	018−02	弥生土器 壷	o−0	SD 31	最大径20.4	外:櫛描簾状文、櫛描横線文、櫛描波状文、ハケメ 内:オサエ、ナデ、ハケメ	やや密	並	浅黄橙、褐灰		ハケメ後、内面に爪あとが多く残る
2	032−01	弥生土器 甕	n−1	SD 31	底径 6.3	ナデ	粗	並	外:鈍い黄橙 内:黄灰	底部完存	摩滅のため調整不明瞭
3	020−01	弥生土器 甕	o−1	SD 31	底径 8.3	外:ハケメ、底部ナデ 内:ナデ	やや粗	並	外:灰白、灰黄褐 内:褐灰、灰白	底部完存	外面煤付着、内面底5cmより上に煤付着
4	033−04	弥生土器 壷	r−6	SK 44	体部最大径約32.0	外:ミガキ、櫛描波状文、櫛描横線文	やや粗	並	鈍い黄橙、鈍い橙	体部1／5	内面摩滅のため調整不明瞭、外面黒斑あり
5	032−02	弥生土器 甕	t−9	SK 46	底径 6.1	外:ハケメ、ナデ 内:ナデ	粗	並	外:灰黄褐 内:灰白	底部1／2	底部焼成前穿孔
6	029−03	弥生土器 甕	c−2	SD7		外:ハケメ、ナデ 内:ナデ	やや粗	並	橙、鈍い橙、褐灰	底径3／4	底部に藁の痕跡
7	017−03	弥生土器 壷	b−1	SD 19	底径 5.2	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	並	鈍い黄橙、灰	底部完存	
8	037−05	弥生土器 壷	b−0	SD 11	底径 9.2	外:ミガキ 内:ミガキ	やや粗	並	鈍い黄橙、黄灰、黒	底部1／4	底部黒変
9	032−05	弥生土器 甕	試掘坑113	113	底径 10.1	外:ナデ、ハケメ、底部未調整	粗	並	外:鈍い黄橙 内:鈍い橙	底部1／2	剥離のため調整不明瞭
10	034−01	弥生土器 壷	試掘坑119	119流路	体部最大径26.2	外:ハケメ後ミガキ、口頸部突帯貼り付け、刻み、沈線2条×3、ヘラ沈線1条 内:ミガキ、オサエ、ナデ、ミガキ	粗	並	黒褐、灰黄褐、鈍い黄橙	体部1／4	外面黒斑
11	025−05	土師器 杯蓋	a−0	SZ4	口径 14.6 器高 2.9	外:回転ナデ、摘み貼り付け、ナデ 内:回転ナデ	やや密	不良	灰白	口縁部1／5	表面摩滅のため調整不明瞭
12	025−03	須恵器 杯蓋	a−1	SZ4	つまみ径2.5	外:回転ナデ、回転ケズリ、摘み貼り付け後回転ナデ 内:回転ナデ	密	並	灰白	つまみ完存	
13	025−04	須恵器 杯蓋	a−1	SZ4	口径 14.5	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	密	良	灰	口縁部1／4	摘み剥離
14	031−04	須恵器 高杯	b−1	SZ4	口径 8.1	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	並	灰、灰白	口縁部1／3	
15	024−02	須恵器 杯	a−1	SZ4	口径 14.0 器高 3.6		やや密	不良	灰白	口縁部1／4	表面剥離のため調整不明瞭、外面煤付着
16	024−03	土師器 杯	a−1	SZ4	口径 12.6 器高 3.0	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	並	鈍い黄橙	口縁部1／3	
17	024−06	土師器 杯	a−1	SZ4	口径 14.8 器高 2.8	内外ナデ? 内:口縁部ヨコナデ	やや密	並	橙	口縁部若干	表面剥離のため調整不明瞭
18	029−06	土師器 杯	a−0	SZ4	口径 13.7 器高 2.95	外:ミガキ、ナデ 内:ナデ	やや密	並	橙		表面剥離のため調整不明瞭
19	024−04	土師器 皿	a−1	SZ4	口径 13.6 器高 2.1	外:ミガキ? 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	橙	口縁部1／5	外面剥離のため調整不明瞭
20	024−05	土師器 皿	a−1	SZ4	口径 18.8 器高 2.2	外:ミガキ? 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	橙	口縁部1／10	外面剥離のため調整不明瞭
21	025−01	須恵器 杯	a−0	SZ4	底径 19.0	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	密	良	灰白	底部1／3	
22	024−01	土師器 甕	a−0	SZ4	口径 15.8	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	橙	口縁部1／6	表面剥離のため調整不明瞭
23	025−02	土師器 甕	a−1	SZ4	口径 25.4	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ	粗	並	橙	口縁部1／10	表面剥離のため調整不明瞭
24	026−05	土師器 甑	a−0	SZ4	底径 15.5	外:ナデ、ハケメ 内:ケズリ	やや粗	並	外:灰白 内:浅黄橙	底部1／4	
25	038-03	土師器 甕	a−1	SZ4		外:ナデ、ハケメ 内:ハケメ、ケズリ					
26	030−03	土師器 甑	a−0	SZ4		ナデ	やや密	並	橙		ミニチュア
27	030−07	土錘	b−0	SZ4	長さ 3.2 重さ 5.01		やや粗	並	灰	欠損あり	
28	024−07	土錘	a−1	SZ4	最大長 5.6 重さ 15.0		やや密	並	橙	一部欠損	摩滅のため調整不明瞭
29	028−07	土錘	b−0	SZ4	長さ 3.2 重さ 31.9		やや密	並	灰黄、黄灰	完存	
30	031−05	石製品 砥石	a−1	SZ4							2面使用
31	006−01	須恵器 杯蓋	b−0	SK9 I層	口径 19.1 器高 3.1	外:ロクロナデ、ロクロケズリ、ナデ、つまみ貼り付けナデ 内:ロクロナデ、仕上げナデ	やや粗	良	灰白、灰	口縁部2／3	
32	016−04	須恵器 杯蓋	b−0	SK9 I層	口径 13.5 器高 2.4	外:回転ナデ、摘み貼り付け、ナデ 内:回転ナデ	やや密	並	灰白、灰	口縁部1／5	自然釉
33	036−01	須恵器 杯蓋	b−0	SK9 I層	口径 14.0 器高 2.3	外:回転ナデ、摘み貼り付け後ナデ 内:回転ナデ、仕上げナデ	やや密	並	灰白	ほぼ完存	摩滅のため調整不明瞭
34	006−02	須恵器 杯	b−0	SK9 I層	口径 17.5 器高 5.1	外:回転ナデ、高台貼り付け、底部ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ、仕上げナデ	やや粗	良	灰白	口縁部1／8	
35	036−03	須恵器 杯	b−0	SK9 I層	口径 16.5 器高 5.0	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼付け高台ナデ 内:回転ナデ	やや密	良	灰白、灰	口縁部1／2	自然釉
36	036−04	須恵器 杯	b−0	SK9 I層	口径 13.5 器高 4.1	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼付け高台ナデ 内:回転ナデ、仕上げナデ	やや密	並	灰白、灰	口縁部2／3	

第４表　出土遺物観察表（１）

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
37	021 −02	須恵器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.0 器高 3.8	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼り付け高台 内:回転ナデ	やや密	並	灰白、灰	口縁部 1／2	自然釉
38	008 −06	須恵器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.5 器高 3.9	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼付け高台ナデ 内:回転ナデ	やや粗	不良	灰白	底部 2／3	煤付着
39	014 −02	須恵器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6 器高 4.2	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼り付け高台 内:回転ナデ、仕上げナデ	やや密	並	灰白	完存	
40	014 −05	須恵器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6 器高 3.4	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	やや密	並	外:灰白 内:灰	口縁部 1／2	
41	013 −03	須恵器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.5 器高 3.8	外:回転ナデ、貼り付け高台ナデ 内:回転ナデ	密	良	灰	口縁部 1／3	
42	036 −05	須恵器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.0 器高 3.6	外:回転ナデ、底部ヘラ切り 内:回転ナデ	やや密	良	灰白	口縁部 1／4	底部ヘラ記号
43	014 −04	須恵器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.0 器高 4.0	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	やや密	不良	灰白	底部 1／3	
44	008 −05	須恵器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.0 器高 3.8	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼付け高台ナデ 内:回転ナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	底部墨書「大厨」
45	036 −02	須恵器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.5 器高 4.0	外:回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、貼付け高台ナデ 内:回転ナデ	やや密	良	灰	口縁部 1／3	底部墨書「色…」
46	014 −03	須恵器？ 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6 器高 3.8	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／2	煤付着
47	007 −03	土師器？ 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 11.0 器高 3.9	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰黄	口縁部 1／4	
48	011 −05	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 10.5 器高 3.0	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	粗	並	灰白	口縁部 1／4	
49	035 −03	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6 器高 3.8	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	粗	並	橙	ほぼ完存	外面黒斑、煤付着
50	022 −03	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.0	内外ナデ？	やや粗	並	鈍い黄橙	口縁部 1／5	摩滅のため調整不明瞭
51	009 −03	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.9 器高 3.3	内外ナデ？	粗	並	鈍い橙	口縁部 1／2	表面剥離のため調整不明瞭、外面煤付着
52	008 −04	土師器 杯	b−0 c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.0 器高 3.1	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	並	橙、浅黄橙	口縁部 2／3	表面剥離のため調整不明瞭、外面煤付着
53	016 −02	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.5 器高 3.1	内外ナデ？	やや粗	並	橙	口縁部 1／2	摩滅のため調整不明瞭
54	006 −05	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6	外:ナデ？口縁部ヨコナデ 内:ナデ	粗	並	外:灰白、鈍い橙 内:灰白、浅黄橙	口縁部 1／2	表面剥離のため調整不明瞭
55	009 −02	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.0 器高 3.2	内外ナデ？	やや粗	並	外:浅黄橙 内:灰白	口縁部 1／3	表面剥離のため調整不明瞭
56	007 −02	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.6 器高 3.6	外:オサエ、ナデ(工具痕)、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	並	鈍い黄橙、鈍い橙	完存	内面剥離のため調整不明瞭
57	014 −07	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 12.8	外:ナデ、ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外:灰黄褐 内:鈍い橙	口縁部 1／8	表面剥離
58	006 −06	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.0 器高 2.8	外:ナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:褐灰 内:鈍い橙	口縁部 1／5	表面剥離のため調整不明瞭
59	009 −01	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.8 器高 3.8	内外ナデ？ 内:口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口縁部 3／4	表面剥離のため調整不明瞭
60	021 −04	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.0 器高 3.2	内外ナデ？、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白、灰	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭
61	006 −03	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.5 器高 3.2	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ？	やや粗	並	橙	口縁部 1／4	表面剥離のため調整不明瞭
62	023 −03	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.8 器高 3.5	外:ミガキ 内:ナデ	やや密	並	橙	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭
63	035 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.6 器高 3.6	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	粗	並	灰黄	口縁部 1／2	底部墨書「十」
64	011 −03	土師器 杯	b−0 c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.5 器高 3.1	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／4	
65	007 −01	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.2 器高 3.2	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや密	並	外:橙、黄橙 内:鈍い黄橙	口縁部 4／5	表面剥離のため調整不明瞭
66	011 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 13.5	外:ナデ、ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ、放射暗文、螺旋暗文	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／4	暗文
67	022 −04	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 15.0 器高 2.8	外:ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ、口縁部ヨコナデ、放射暗文、螺旋暗文	やや密	並	橙	口縁部 1／4	暗文
68	012 −03	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 16.5 器高 4.4	外:オサエ、ナデ 内:ナデ	やや粗	並	鈍い橙	口縁部 1／10	表面剥離のため調整不明瞭
69	012 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 17.0 器高 3.7	外:ミガキ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	粗	並	橙	口縁部 1／4	表面剥離のため調整不明瞭
70	008 −02	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 17.5 器高 4.8	外:ミガキ 内:ナデ、放射暗文	やや粗	並	鈍い橙	口縁部 1／2	暗文
71	006 −04	土師器 皿	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 14.6 器高 1.8	内:ナデ	粗	並	鈍い橙 黄灰	口縁部 1／4	表面剥離のため調整不明瞭
72	037 −03	土師器 皿	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 17.0 器高 2.2	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	鈍い橙、褐灰	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭

第５表　出土遺物観察表（２）

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
73	012 −02	土師器 皿	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 18.0 器高 2.5	外:ナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	橙	口縁部 1／5	表面剥離のため調整不明瞭
74	016 −01	土師器 皿	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 20.0 器高 2.4	内外ナデ?	やや密	並	橙	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭
75	010 −02	土師器 皿	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 18.8 器高 3.1	外:ミガキ 内:ナデ、螺旋暗文	やや粗	並	外:淺黄橙 内:橙	口縁部 1／4	表面剥離のため調整不明瞭
76	008 −03	須恵器 杯	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 19.0 器高 2.9	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	やや粗	並	淺黄橙、黄灰	口縁部 1／6	内面剥離のため調整不明瞭
77	009 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 18.2 器高 5.1	外:ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ、放射暗文、螺旋暗文	やや密	並	橙	口縁部 1／2	底部墨書「大(?)厨」、暗文
78	008 −01	土師器 皿	b−0 c−0	SK9 Ⅰ層	口径 19.5 器高 2.5	外:ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ、螺旋暗文	やや粗	並	橙	ほぼ完存	暗文
79	007 −04	黒色土器	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 18.0	外:ミガキ、口縁部ヨコナデ 内:ミガキ	やや密	並	外:鈍い黄橙、黒 内:黒	口縁部 1／4	外面黒斑
80	012 −05	製塩土器	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 15.0 器高 5.9	外:ナデ 内:ナデ	粗	並	鈍い橙	口縁部 1／6	表面剥離のため調整不明瞭
81	016 −03	土師器 高杯	b−0	SK9 Ⅰ層		外:ケズリ、面取り 内:ナデ	やや密	並	鈍い橙		
82	008 −07	土師器 高杯	b−0	SK9 Ⅰ層		外:ケズリ、面取り、裾部ヨコナデ 内:ナデ	やや密	並	橙		
83	010 −03	土師器 高杯	c−0	SK9 Ⅰ層	底径 11.6	外:オサエ、ケズリ、面取り、裾部ヨコナデ 内:工具ナデ、裾部ヨコナデ	やや密	並	外:鈍い橙、灰白 内:鈍い黄橙	底部 若干	
84	013 −01	土師器 高杯	c−0	SK9 Ⅰ層	底径 13.0	外:ナデ、裾部オサエ、ヨコナデ 内:ナデ、裾部ヨコナデ	粗	並	橙	底部 若干	
85	027 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 20.6	外:ハケメ、オサエ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外:鈍い橙 内:灰褐	口縁部 1／8	煤付着
86	023 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 18.6	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白、灰	口縁部 完存	口頸部煤付着
87	018 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅰ層		外:ナデ、焼成後穿孔 内:ナデ	やや密	並	灰白、黒褐、褐灰		穿孔、外面・内面底部に煤付着
88	011 −02	土師器 鉢	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 29.0 器高 7.3	外:オサエ、ハケメ、ミガキ、口縁部ヨコナデ、ミガキ 内:ナデ、ミガキ、口縁部ヨコナデ、ミガキ	やや密	良	鈍い橙	口縁部 1／4	
89	023 −02	土師器 鉢	b−0	SK9 Ⅰ層	口径 30.6 器高 9.7	内:ナデ	やや粗	並	灰白、淺黄橙	口縁部 1／2	摩滅のため調整不明瞭
90	019 −02	土師器 鉢	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 33.0 器高 11.4	外:オサエ、ミガキ	やや粗	並	赤橙	口縁部 1／2	表面剥離のため調整不明瞭
91	011 −01	須恵器 壺	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 10.5	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	密	並	明褐灰	口縁部 1／3	外面自然釉、重ね焼き痕
92	021 −01	須恵器 鉢	c−0	SK9 Ⅰ層	口径 26.5 器高 13.9	外:回転ナデ、回転ケズリ、底部ナデ 内:回転ナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／2	漆入れの鉢、内面に漆付着
93	037 −01	須恵器 壺	b−0	SK9 Ⅰ層		外:回転ナデ、タタキ 内:回転ナデ、タタキ具痕	やや密	並	赤灰、灰		
94	036 −06	須恵器 鉢	b−0	SK9 Ⅰ層	底径 13.0	外:回転ナデ、ナデ 内:回転ナデ	やや粗	並	灰	底部 1／2	自然釉
95	038 −01	須恵器 甑	c−0	SK9 Ⅰ層		ナデ、タタキ					
96	016 −06	須恵器 獣脚	c−0	SK9 Ⅰ層		ケズリ、ナデ、底部研磨	やや密	並	灰、灰白	脚部完存	硯の脚か
97	028 −03	土錘	b−0	SK9 Ⅰ層	最大長 4.9 重さ 6.0		やや密	並	鈍い橙	完存	
98	028 −01	土錘	b−0	SK9 Ⅰ層	残存長 4.8 重さ 6.28		やや密	並	鈍い橙	欠損あり	
99	028 −02	土錘	b−0	SK9 Ⅰ層	最大長 5.7 重さ 8.3		やや密	並	鈍い黄橙	完存	
100	028 −04	土錘	b−0	SK9 Ⅰ層	残存長 5.6 重さ 8.55		やや密	並	鈍い黄橙	欠損あり	
101	022 −06	土錘	b−0	SK9 Ⅰ層	最大長 5.8 重さ 8.4		やや密	並	橙、淺黄橙	完存	
102	022 −07	土錘	c−0	SK9 Ⅰ層	最大長 6.1 重さ 7.2		やや密	並	橙	完存	
103	014 −06	土錘	c−0	SK9 Ⅰ層	残長5.2 幅1.6	重さ14.265g	やや密	並	鈍い黄橙	欠損あり	
104	022 −05	土錘	c−0	SK9 Ⅰ層	最大長 6.3 重さ 16.0		やや密	並	鈍い黄橙、橙	一部欠損	
105	026 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 12.0	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	灰黄	口縁部 1／4	
106	015 −05	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 13.0 器高 3.5	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰黄	口縁部 2／3	表面剥離のため調整不明瞭
107	015 −06	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 12.0 器高 3.2	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	灰黄、鈍い橙	口縁部 1／8	
108	035 −05	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 12.6 器高 3.7	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	粗	並	灰黄	口縁部 1／3	剥離のため調整不明瞭 外面黒斑

第６表　出土遺物観察表(３)

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値（cm）	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
109	022 −01	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 16.0 器高 3.3	外：ナデ、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	鈍い黄橙、鈍い橙	口縁部1／4	内面漆？付着
110	023 −04	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 16.6 器高 4.3	外：ミガキ、ナデ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	灰白、鈍い黄橙	口縁部1／5	
111	015 −01	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 17.0 器高 3.7	外：口縁部ヨコナデ 内：ナデ、放射暗文	やや粗	並	灰白	口縁部1／2	表面剥離のため調整不明瞭
112	012 −01	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 18.2 器高 4.5	外：オサエ、ナデ、ミガキ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	鈍い橙	口縁部5／6	表面剥離のため調整不明瞭、外面黒斑
113	015 −02	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 15.0 器高 3.8	外：ミガキ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、放射暗文、螺旋暗文	密	良	灰黄	口縁部1／2	5本1単位の放射暗文、底部ヘラ記号
114	015 −04	土師器 杯	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 14.0 器高 2.3	外：ナデ、ミガキ 内：ミガキ？	やや粗	並	灰白	口縁部1／4	表面剥離のため調整不明瞭
115	035 −06	土師器 皿	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 15.0 器高 2.5	外：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	灰黄褐	口縁部1／3	
116	022 −02	土師器 杯	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 13.0 器高 2.0	外：ミガキ、口縁部ヨコナデ 内：ミガキ、口縁部ヨコナデ、螺旋暗文	やや密	並	鈍い黄橙	口縁部1／4	暗文、内面剥離のため調整不明瞭
117	015 −03	土師器 皿	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 17.0	外：ナデ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	良	鈍い橙	口縁部1／5	
118	013 −02	土師器 高杯	b−0	SK9 Ⅱ層	底径 11.3	外：ケズリ、面取り、裾部ヨコナデ 内：ナデ、裾部ヨコナデ、杯部ミガキ	やや密	並	鈍い橙	底部1／2	
119	016 −05	須恵器 高杯	b−0	SK9 Ⅱ層		外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	並	灰		杯部に付着物あり、自然釉
120	021 −03	須恵器 高杯	c−0	SK9 Ⅱ層		外：回転ナデ 内：シボリ痕、回転ナデ	やや密	並	灰		漆付着
121	010 −01	土師器 甕	b−0 c−0	SK9 Ⅱ層	口径 16.1	外：ハケメ、口縁部ヨコナデ 内：ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外：浅黄橙、灰白 内：灰白、橙	口縁部1／2	外面剥離のため調整不明瞭
122	035 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅱ層	口径 17.0	外：ハケメ、ケズリ、口縁部ヨコナデ 内：ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部1／6	煤付着
123	035 −02	土師器 甕	c−0	SK9 Ⅱ層		外：ハケメ、ケズリ	粗	並	灰白	底部完存	内面剥離のため調整不明瞭
124	014 −01	土師器 鉢	c−0	SK9 Ⅱ層	口径 23.7 器高 6.2	外：ミガキ、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、ミガキ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外：灰白、橙 内：橙、鈍い黄橙	口縁部3／4	表面剥離のため調整不明瞭、外面煤付着
125	017 −01	土師器 鉢	b−0 c−0	SK9 Ⅱ層	口径 29.6 器高 8.5	外：オサエ、ケズリ、口縁部ヨコナデ、ミガキ 内：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ、ミガキ	やや密	良	灰白	口縁部1／2	
126	019 −01	土師器 鉢		SK9 Ⅱ層	口径 31.1 器高 8.2	外：オサエ、ナデ、ミガキ、ケズリ、口縁部ヨコナデ 内：ミガキ	やや密	並	外：浅黄橙 内：橙	口縁部1／3	内面剥離のため調整不明瞭
127	001 −01	木製品 曲物底	c−0	SK9 Ⅱ層	径 11.8 厚 約0.6					完存	
128	001 −02	木製品 曲物底	b−0	SK9 Ⅱ層	径 約19.4 厚さ 約0.7					約1／2	釘の痕跡残る
129	028 −08	砥石	b−0	SK9 Ⅱ層							中砥、四面使用
130	002 −05	木製品 板状	b−0	SK9 Ⅲ層	長さ 16.3 厚さ 0.8						
131	002 −01	木製品 斎串	b−0	SK9 Ⅲ層	長さ 22.6 厚さ 0.3					完存	
132	002 −03	木製品 斎串	b−0	SK9 Ⅲ層	長さ 22.5 厚さ 0.2					上部欠損	
133	002 −02	木製品 斎串	b−0	SK9 Ⅲ層	残存長19.4 厚さ 0.3					下部欠損	
134	002 −04	木製品 斎串	b−0	SK9 Ⅲ層	長さ 19.2 厚さ 0.3					ほぼ完存	
135	035 −07	土師器 甕	c−0	SK9 Ⅲ層	底径 3.9	外：オサエ、ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	灰白	底部完存	
136	003 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅲ層	口径 16.8 器高 15.5	外：ハケメ、ナデ、ハケメ、口縁部ヨコナデ 内：ハケメ、ケズリ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外：灰白 内：灰	口縁部1／2	煤付着
137	004 −02	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅲ層	口径 15.2 器高 12.5	外：ハケメ、ケズリ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内：ハケメ、工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外：灰白 内：灰、黒	完存	煤付着
138	004 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅲ層	口径 17.2 器高 12.2	外：ハケメ、ケズリ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内：工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外：灰黄褐 内：黒褐	口縁部2／3	煤付着
139	003 −02	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅲ層	口径 16.0 器高 14.5	外：ハケメ、ケズリ、口縁部ヨコナデ 内：工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外：灰白 内：灰	口縁部3／4	煤付着
140	005 −01	土師器 甕	b−0	SK9 Ⅲ層	口径 17.8 器高 15.1	外：ハケメ、ケズリ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内：オサエ、工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外：灰白 内：灰白	口縁部2／3	煤付着
141	031 −02	須恵器 杯身	v−9	SD 40	口径 12.1	外：回転ナデ、回転ケズリ 内：回転ナデ	やや密	並	灰白	口縁部1／8	重ね焼き痕
142	026 −02	須恵器 杯身	u−9	SD 41	口径 12.0 器高 3.7	外：回転ナデ、回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	並	灰白	口縁部1／3	
143	031 −01	須恵器 杯身	u−9	SD 40	口径 12.4 器高 3.9	外：回転ナデ、回転ケズリ 内：回転ナデ	やや粗	並	灰、灰白	口縁部1／7	
144	026 −01	須恵器 杯蓋	n−1	SD 29	口径 14.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密	良	灰白	口縁部1／3	

第７表　出土遺物観察表（４）

番号	実測番号	器種等	小地区	遺構名	計測値(cm)	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
145	026 −03	須恵器 杯身	m−1	SD 29	口径 11.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	並	灰	口縁部 1／5	
146	031 −03	須恵器 杯身	m−1	SD 11	口径 9.55 器高 2.4	外:回転ナデ、底部ヘラ切り 内:回転ナデ、仕上げナデ	やや密	並	灰白	口縁部 1／2	外面自然釉
147	029 −02	土師器 高杯	イ-12	SD 51		外:ケズリ、面取り 内:シボリ痕、ナデ	やや粗	並	橙、灰白、暗灰		
148	030 −01	土師器 杯	b−1	SD 11	口径 10.4 器高 4.1	外:ナデ、底部工具痕 内:ナデ	やや粗	並	灰白、黄灰、灰	口縁部 1／2	摩滅のため調整不明瞭
149	027 −03	土師器 甕	b−1	SD 11	口径 14.3	外:オサエ、ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:淡赤橙 内:灰黄褐	口縁部 1／6	外面剥離
150	027 −02	土師器 甕	b−1	SD 11	口径約17.0	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ハケメ、ナデ、ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外:鈍い褐 内:灰褐	口縁部 1／4	歪み大、煤付着
151	029 −01	土師器 甕	a−1	SD 11	口径 17.1	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白、鈍い黄橙	口縁部 1／8	
152	027 −05	土師器 甕	b−1	SD 11	口径 17.0	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ハケメ、ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:鈍い黄橙 内:灰黄褐	口縁部 1／5	
153	030 −02	土師器	b−1	SD 11		ナデ	やや粗	並	灰白		底部に木葉痕
154	028 −06	土錘	b−1	SD 11	残存長 4.4 重さ 16.0		やや密	並	浅黄橙、灰	完存	孔が貫通していない(未製品？)
155	033 −02	土師器 杯	イ−12	包含 層	口径 12.0 器高 3.6	内外ナデ？	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／8	摩滅のため調整不明瞭、煤付着
156	029 −05	土師器 杯	イ−12	SD 51	口径約15.0 器高 2.9	外:ナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰褐、鈍い橙	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭
157	029 −04	土師器 皿	イ−12	SD 51	口径 17.8 器高 2.0	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 1／12	
158	017 −02	土師器 甕	r−9	包含 層	口径約20.0	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙	口縁部 若干	
159	017 −04	土師器 甕	y−9	SD 36	口径 13.5 器高 12.0	外:ハケメ、ケズリ、口縁部ヨコナデ 内:工具ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	灰白、浅黄橙	口縁部 1／2	表面剥離、内面底部に煤付着
160	037 −02	土師器 甕	イ−10	SD 50		外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:オサエ、ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	鈍い黄橙、褐灰		
161	030 −06	土錘	r−3	SD 15	長さ 5.3 重さ 5.525		やや粗	並	褐灰、灰白、灰	欠損あり	
162	028 −05	土錘	b−0	SK9	残存長 5.0 重さ 15.01		やや密	並	灰、浅黄橙	欠損あり	煤付着
163	030 −05	土錘	r−5	SD 15	長さ 5.15 重さ19.915		やや粗	並	浅黄橙、灰白、灰	欠損あり	
164	030 −04	土錘	イ−12	SD 51	長さ 6.25 重さ 25.85		やや粗	並	橙、灰白	完存	
165	034 −02	土錘	r−4	包含 層	残存長 6.5 重さ 18.8		粗	並	灰白	欠損	
166	031 −06	石製品 砥石									
167	032 −06	土師器 甕	b−0	pit2	口径 15.5	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:鈍い橙 内:浅黄橙	口縁部 1／8	
168	027 −04	土師器 甕	w−9	pit1	口径 19.0	外:ハケメ、口縁部ヨコナデ 内:ハケメ、口縁部ヨコナデ	やや密	並	外:鈍い黄橙 内:橙	口縁部 若干	
169	032 −04	須恵器 杯	a−1	pit3	高台径 9.2	外:回転ナデ、貼り付け高台 内:回転ナデ	やや密	良	灰白	高台部 1／5	
170	032 −03	土師器 杯	r−4	pit2	口径 12.9 器高 3.0	外:オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ	粗	並	橙	口縁部 1／2	
171	032 −07	青磁 椀	ウ−1 5	包含 層	高台径 5.7	外:ロクロナデ、削り出し高台、施釉 内:ロクロナデ、施釉、見込み釉かきとり	密	良	灰白 釉:緑灰	高台部 若干	
172	037 −04	製塩土器	試掘坑 112	102		外:オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	橙		
173	033 −03	土師器 杯	試掘坑 114	114 溝	口径 15.5 器高 4.2	外:ナデ、口縁部ヨコナデ 内:ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	並	外:橙、浅黄橙 内:浅黄橙	口縁部 若干	表面剥離のため調整不明瞭
174	033 −01	須恵器 壷	試掘坑 119	溝	頸部径 6.6	外:回転ナデ、沈線、刺突、沈線、回転ケズリ 内:回転ナデ、オサエ	やや密	良	外:灰白、灰 内:灰白	頸部 1／3	ハソウか

第８表　出土遺物観察表(５)

Ⅳ 結　語

(1) 方形周溝墓について

替田遺跡・弐ノ坪遺跡では、弥生時代中期前半の竪穴住居や墓と考えられる土坑群が計70基ほどの土坑が確認され[1]、中期の前半には集落が営まれていたことが明らかになっている。しかし、中期後半以降になると、替田遺跡流路・包含層から後期の遺物が出土している程度で明確な遺構は確認できていない。両遺跡では焼失した竪穴住居が２棟確認されているなど何らかの理由により中期後半になる以前に集落が移動している可能性が考えられる。その点で今回の方形周溝墓の検出により、中期後半にも安濃川左岸に遺構が存在することが明らかになったのは新たな知見である。

方形周溝墓は全てを検出したものについては一基確認したのみであるが、周溝と思われる溝の存在から、３基以上存在していると思われる。遺物はほとんど見られないがいずれも四隅が途切れるタイプのものである。中勢地内での弥生中期後半の方形周溝墓は納所遺跡[2]や橋垣内遺跡[3]などで確認されており、いずれも四隅が途切れるタイプのものが主体を占める。現状では長方形のプランを呈しているが、切り合いを持つ他の方形周溝墓に伴う可能性も考えられるため、断定はできない。

方形周溝墓は、自然流路を避け東側の微高地に展開している。その地点は安定した黄灰色系のシルトであり、当時からも安定していたと考えられる。同時期の遺構は周辺の調査を合わせても未確認であるが、今後の調査により明らかになるであろう。

(2) ＳＫ９について

ＳＫ９からは完形に近い土師器・須恵器が出土し、「大厨」墨書土器・漆入り鉢・暗文土師器・斎串・獣脚硯片など興味深い遺物が出土している。土師器については内外面とも剥離の著しいものが多く、調整など不明なものが多い。ここではいくつかの事例について若干の説明を加えたい。

今回の調査でＳＫ９各層の出土遺物で時期差を捉えることができる。ここでは各層の様相を確認してみたい。比較できる遺物としては土師器杯・皿・高杯・鉢・甕がある。なお、前述している通り大部分の土師器が表面剥離していることから、調整についてはあまり言及できない。

土師器杯

Ⅰ層・Ⅱ層で出土している。Ⅱ層では口縁部と底部の境が甘く、内彎気味に立ち上がり、口縁部が肥厚しているものと、口縁部外面が段状になり、直線的に開くものがある。前者のものは外面ミガキ、内面は暗文が施されるものがあり、丁寧なつくりである。Ⅰ層ではその他に平安時代的なタイプの杯とされる底部と口縁部の境が明瞭で口縁部が直線的に外に開くものがあり、バラエティーが多い。杯の形態の変化する過渡期といえようか。法量はⅡ層では12.0～17.0cmとばらつきが多いが、Ⅰ層では12.6～14.5cmのものと、16.5～18.0cmのものに分化するように見える。

土師器皿

Ⅱ層では小型のものであるのに対し、Ⅰ層では14.6cmの71を除いては18.0～20.0cmの大型のものにほぼ集中する傾向が窺える。

杯・皿ではⅡ層に比べ、Ⅰ層のほうが口縁端部外反、やや粗雑化の傾向が窺える。

土師器鉢

Ⅰ層・Ⅱ層で確認できる。Ⅱ層では法量や胎土の粗密は異なるものの形状・調整は非常によく似ている。これはⅠ層88も類似するが、Ⅰ層では口縁部は強いヨコナデにより肥厚するものから端部が丸くおさめられるものもあり、やや雑なつくりとなっている。

土師器高杯

Ⅰ層・Ⅱ層で確認できる。ただし、Ⅱ層では短脚のもの１点しか出土しておらず、これが時期差なのかどうかは不明である。短脚のものでは裾短部が強くナデられ下方に突出していていたものが内傾しながら尖って収まるものに変化している。

土師器甕

それぞれの層で確認できる。Ⅲ層では完形の５個体が出土しているが、それぞれ調整は異なる。目視では胎土・焼成には差は見られないことから

も、当地域で様々な形態の甕が使われていたものと考えられる。ケズリは見られるものの底部の器壁は厚い。Ⅱ層の甕はよく似ており、ともに外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが見られる。下半は明らかではないがヘラケズリを行っているものと考えられる。口縁端部はヨコナデされ、口縁部がつまみあげ状になる。Ⅰ層の甕は上半部しかはっきりしない。外面は剥離しているが縦～斜め方向のハケメの痕跡が残る。口縁部はつまみ上げがはっきりしないものと端部が内傾するものが見られる。

ここで見てきたものはあくまで今調査の中でいえるものであり、これが時期差によるものか偶然によるものかは判断しにくい。今後当時期の調査が増加することにより、より明確になるであろう。

(3) ＳＫ９について

以上のことを踏まえ、ＳＫ９の性格について若干の考察を加えたい。まず当初井戸として掘削されたことに対して興味深いのは自然流路との関係である。このように自然流路を一方の肩として掘削されている例は時期を異にして当地域では普遍的であり、替田遺跡の平安時代の井戸[4]や里前遺跡の中世段階の井戸[5]でも確認されており、効率的に涌き水を得るための有効な手段であったのであろう。

第１段階である土師器甕や斎串が底部からやや浮いて出土していることから、廃棄に際して使い込まれたものではあるが土師器甕を埋め、斎串を埋納したものと考えられる。最終的には竹を立てて「息抜き」を行っている。

Ⅰ層では、涌き水を防ぐためか最下層に褐色の粘土が貼られる。遺物は完形のものが含まれ、埋土には炭・焼土が含まれており、火を伴うような祭祀が行われた可能性があるが、窪み部分に投棄したものかもしれない。時期は東海地方の平安時代の指標とも言える灰釉陶器が出土していないことから平安時代初頭までの遺構と考えている。

(4)「大厨」墨書について

「厨」とはいわゆる厨房・台所施設のことを示すと考えられるが、官衙遺跡から出土することが多く、儀式の場を示したり、饗宴の痕跡を示すものと考えられている[6]。今回の調査ではＳＫ９のⅠ層から須恵器杯・土師器杯の2点に「大厨」と思われる墨書土器が出土している。

三重県内では「厨」と書かれた墨書土器は松阪市閑浄寺遺跡２点（「厨」「下厨前」）、伊賀国府跡２点（「國厨」）、斎宮跡３点が確認されている[7]。閑浄寺遺跡は古代に伊勢神宮の直轄領として神戸が置かれた地域であり[8]、他の２遺跡と合わせいずれも公的な施設と関連する遺跡である。惣作遺跡も何らかの公的施設に関連する遺跡の可能性が高い。

惣作遺跡との関連で推測される公的施設に「市村駅」がある。岡田登氏は『太神宮法楽寺所司等立申文書紛失記』という南北朝時代の古文書に「八条九市村里」という条里名があり、復元した条里に照らし合わせると津市殿村・野田付近になること、殿村に「本馬領」という馬に関わる地名や「井戸」「井尻」という小字が残っているおり、奈良～平安時代の遺物が散布していることなどから、当遺跡の西部に所在を推定されており[9]、今後惣作遺跡の性格を考える上で、ひとつの材料となると思われる。

(5) 惣作遺跡における条里プランの施工について

今回の調査区では約N30°Ｅ傾く溝及びそれに直行する溝が数条確認されている。安濃川右岸は今回のほ場整備が行われるまでは近代以前の地割や坪名称が残存しており、約N30°Ｅの条里の復元作業も行われている[10]。今回の溝について若干の考察を行いたい。

調査区からは、条里方向にほぼ沿った溝はＳＤ11・29、ＳＤ17、ＳＤ16、ＳＤ15、ＳＤ23、ＳＤ27、ＳＤ28、ＳＤ43、ＳＤ39、ＳＤ47、ＳＤ58、ＳＤ49、ＳＤ59があるが、それに伴うような掘立柱建物は確認できなかった。また、比較的幅が狭く平行に並ぶ溝ＳＤ27・28・43やＳＤ36・39・47、ＳＤ58・49は道路の側溝とも考えられるが、狭い調査区のため断定はできない。出土遺物も少なく時期を決める材料には乏しいものの灰釉陶器の見られないことから考えて、平安時代を大きく下るとは考えられず、奈良時代後期～平安時代初頭の範疇で捉えてよいものと思われる。平安時代前期にはすでに耕地化

していたのであろう。

条里地割施工時期の初現として考えられるものがSD11・29である。この溝は奈良時代までには埋没したものと考えられるが、当地域の条里プランに対して何らかの規制力をもった溝として注目される。掘立柱建物は出土遺物がなく時期不明であるが、条里方向に沿わないこと、特にＳＢ59はＳＸ33とほぼ方向を同じくすることから考えて、おそらく先行する建物であろう。狭い調査区のため今回の調査では確認できなかったが、ＳＫ９の存在からもほぼ同時期の生活の痕跡が窺われ、周辺に掘立柱建物が存在するものと考えられる。

平安時代前期になると惣作遺跡の東方にあたる弐ノ坪遺跡[11]に集落が移動している。弐ノ坪遺跡では条里地割に沿った平安時代前期の掘立柱建物が狭い範囲で整然と並び、官衙的な雰囲気が想像される。この他溝が確認されるものの次時代には続かない。

平安時代中期になると更に東に位置する神戸遺跡[12]で古墳前期からの方向の指向性が変化し始め、平安中期に条里プランに乗った掘立柱建物が検出される。神戸遺跡は条里地割に沿った形の掘立柱建物に切り合い関係が認められることから、一定の時間神戸遺跡で定住するに至ったと考えられる。この時期になって安濃川右岸においては条里プランの施工が完成したとも言えよう。なお、安濃川左岸では位田遺跡で平安時代末には確実に条里プランが施工され、平安時代の中期にまで遡る溝も検出されている[13]。このことから条里地割の施工は長期的な幅を持って行われたものと考えられる。

(6) 今後の課題

今回の発掘調査により、これから課題としていかなければならない点を列記したい。

安濃川右岸にも弥生中期後葉の遺構が新たに見られた。方形周溝墓であるが、それを営んだ集落は安濃川左岸を含めてもはっきりしない。替田遺跡や弐ノ坪遺跡で竪穴住居や土坑を用いた人々がどのように移動したのかを含め考える必要があろう。

奈良時代後期～平安時代初頭にかけて条里プランが施工されたことが判明した。奈良時代後期～平安時代初頭については「市村駅」との関係を含め、今後検討する必要がある。今回の発掘調査ではその前段階と考えられる掘立柱建物も検出され、弐ノ坪遺跡や神戸遺跡に段階的に開発されていく様相も窺われることから、周辺の調査を含め古代の土地開発を考えていく必要があろう。

周辺はほ場整備や中勢道路建設によりかつての条里制の名残を失いつつある。今後もいくつかの発掘調査が予定されており、当地の景観は徐々に変化していく。過去の調査例と合わせ、当地域の歴史を明らかにすることは我々の責務であるといえよう。

註

(1) 池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第１次）」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター　1997年)
水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「替田遺跡（第２次）」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998年)
池端清行・西村美幸「弐ノ坪遺跡」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター　1998年)

(2) 伊藤久嗣『納所遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会　1980年)

(3) 穂積裕昌ほか『一般国道23号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会　1997年)

(4) 上記の他、平成11・13年度に県埋蔵文化財センターが調査を行っている。

(5) 山口格・西村美幸「里前遺跡」(『一般国道23号　中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告概報Ⅺ』三重県埋蔵文化財センター　1999年)
及び平成12年度県埋蔵文化財センター調査

(6) 平川南「「厨」墨書土器論」(『山梨研史研究』創刊号　山梨県　1993年)

(7) 『眠りから覚めた文字たちー斎宮跡の墨書土器ー』斎宮歴史博物館　1997年)

(8) 『三重県埋蔵文化財年報18』(三重県教育委員会　1988年)

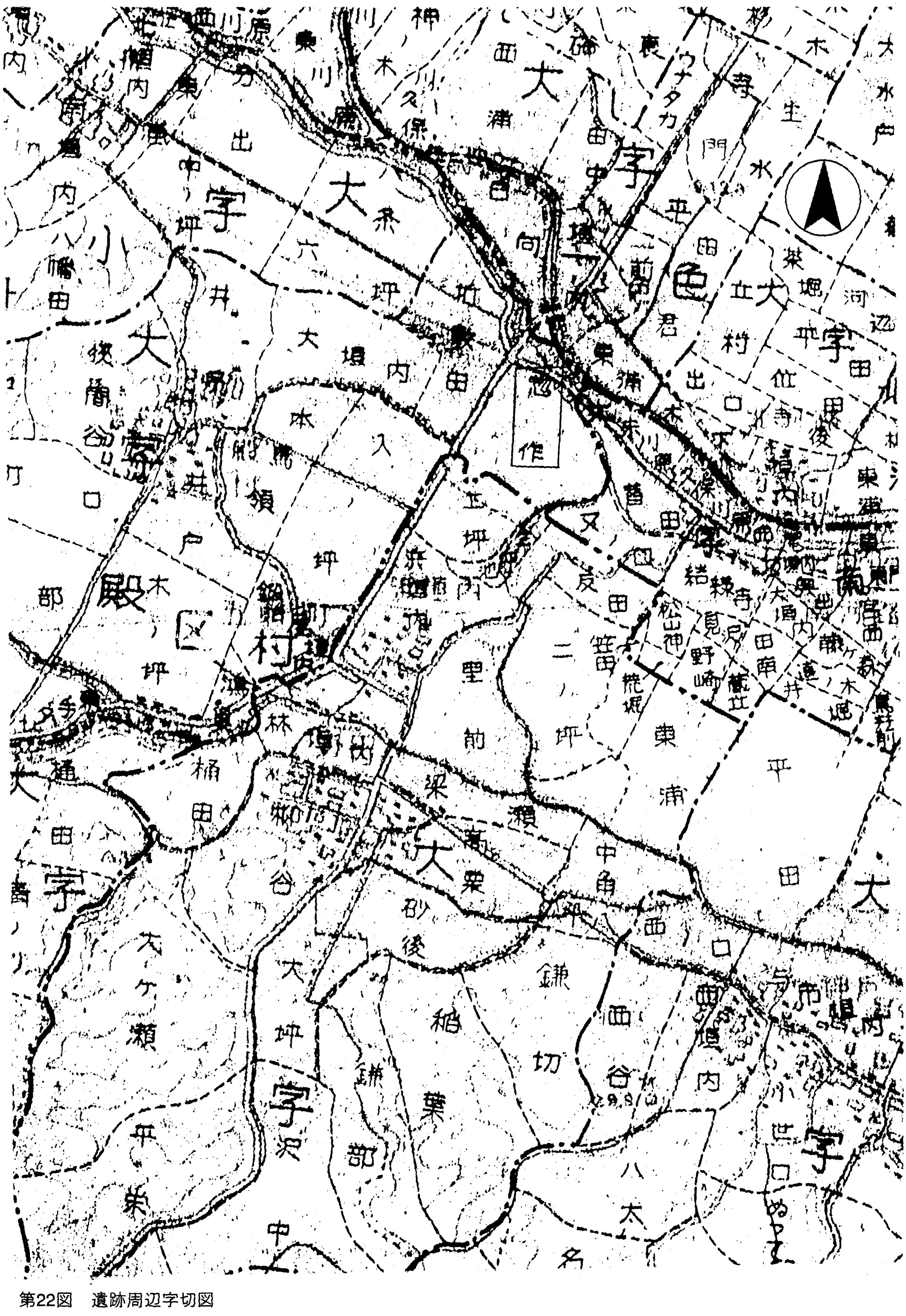
(9) 岡田登「伊勢國市村駅所在地考」(『皇學館論叢第13巻第６号　1980年)

(10) 仲見秀雄「奄芸・安濃・一志の条里制」(仲見秀雄・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979年)

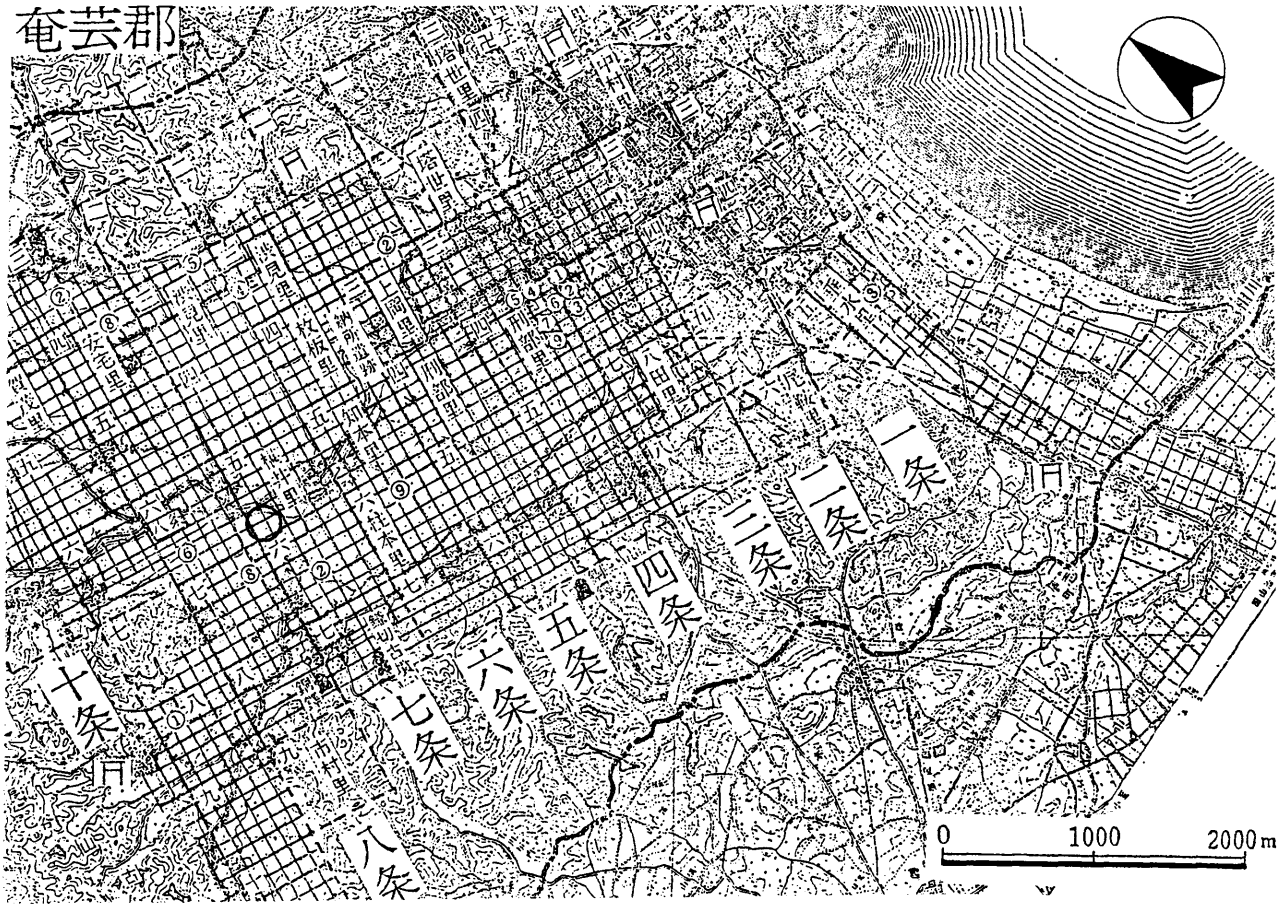
(11) 前掲(１)

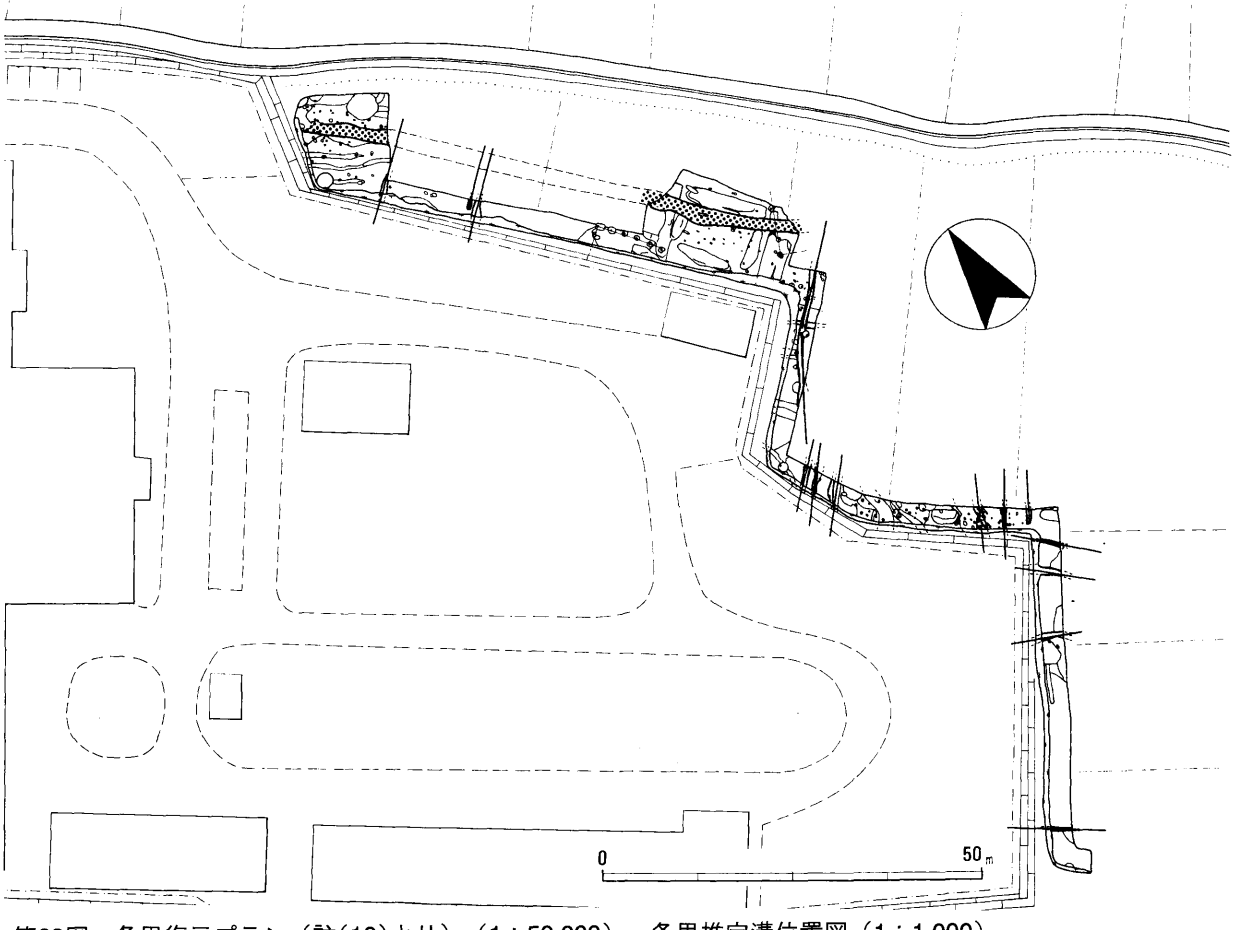
(12) 柴山圭子ほか『神戸遺跡(第２次)・替田遺跡(第３次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　2001年)

(13) 米山浩之『一般国道23号中世道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)



第22図　遺跡周辺字切図





第23図　条里復元プラン（註(10)より）（1：50,000）、条里推定溝位置図（1：1,000）

図版１

Ａ地区全景（西から）

Ｂ地区調査前風景

図版２

Ｂ地区　a-0～c-2（東から）

Ｂ地区　a-0～c-2（西から）

図版３

Ｂ地区　c-2～r-2（西から）

Ｂ地区　作業風景（西から）

図版４

Ｂ地区　l-0～r-2（西から）

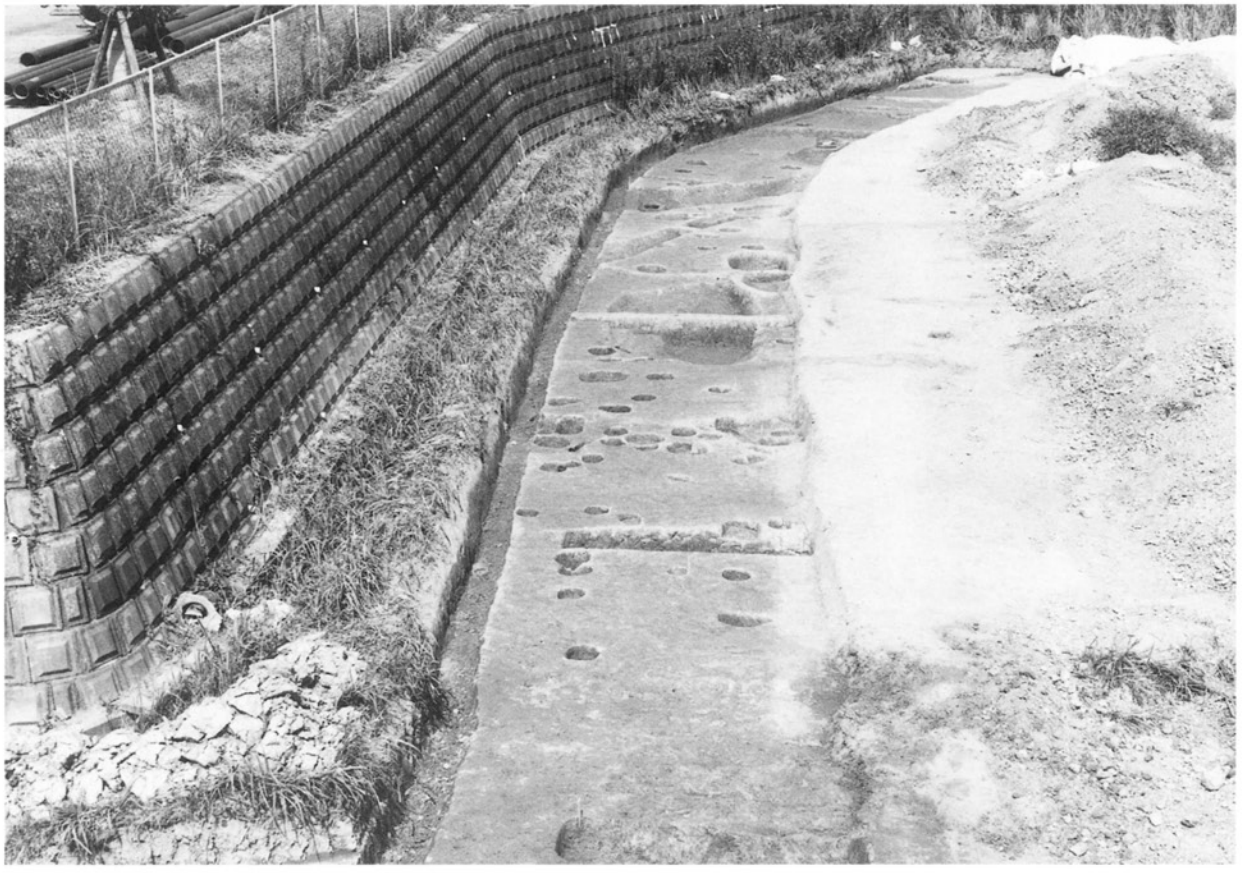
Ｂ地区　l-0～r-2（東から）

図版５

Ｂ地区　r-2～r-5（東から）

Ｂ地区　r-8～z-8（南から）

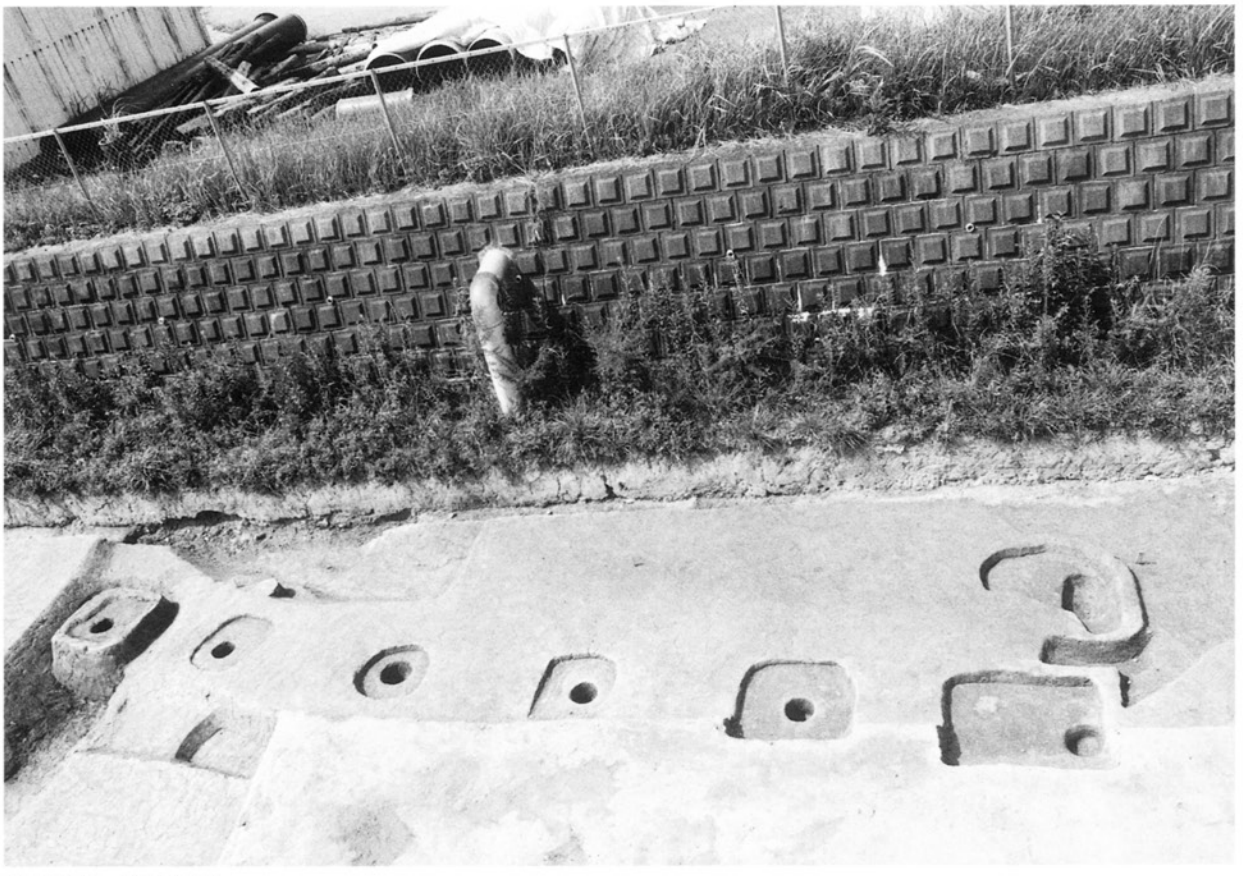
図版６



Ｂ地区　r-8～ア-8（東から）

Ｂ地区　r-8～エ-16（北から）

図版７



ＳＢ５９（北から）

ＳＢ５９（南から）

図版８

ＳＫ９Ⅰ層遺物出土状況（東から）

漆入り鉢出土状況

ＳＫ９Ⅲ層遺物出土状況（東から）

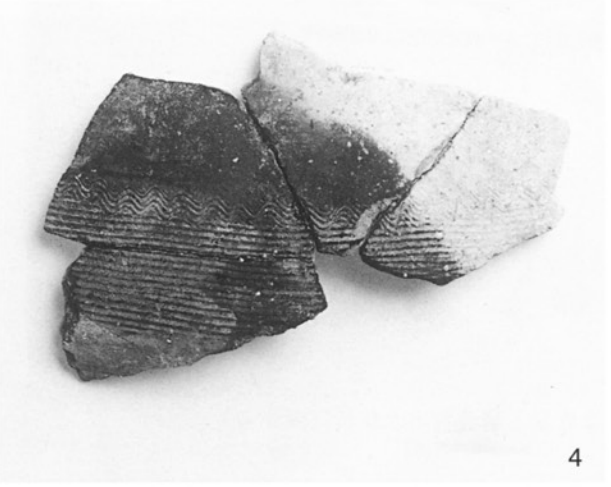
ＳＫ９完掘状況（東から）

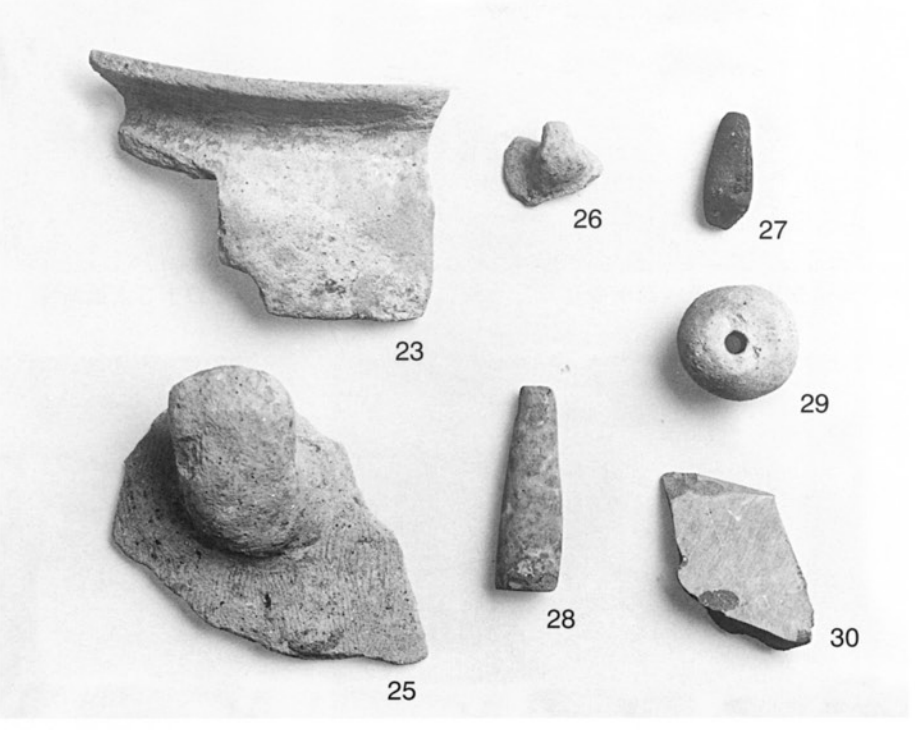
ＳＺ４遺物出土状況（西から）

ＳＤ１３土層断面（南から）

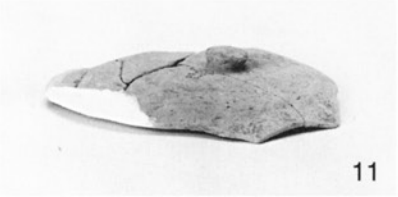
ＳＤ１２土層断面（西から）

ＳＤ１１土層断面（西から）





図版１　出土遺物（１）


11

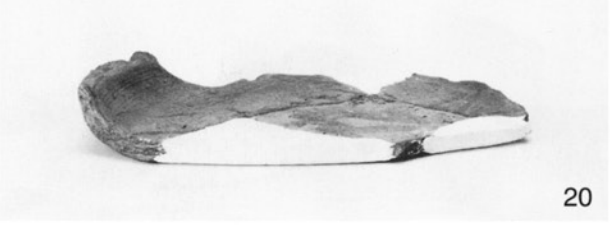
12

32

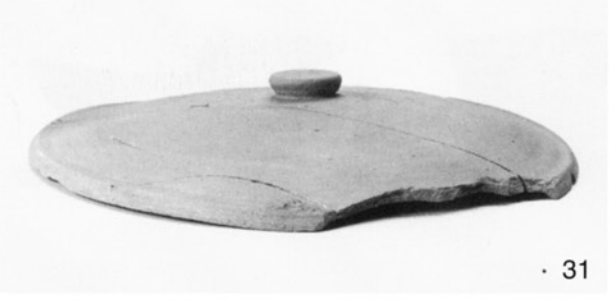
15

16

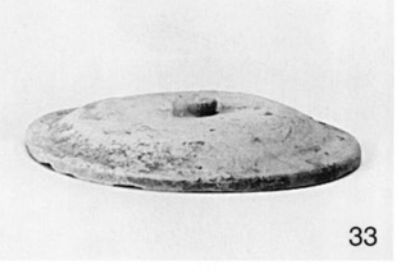
18


20

21


31

35


33

36

37

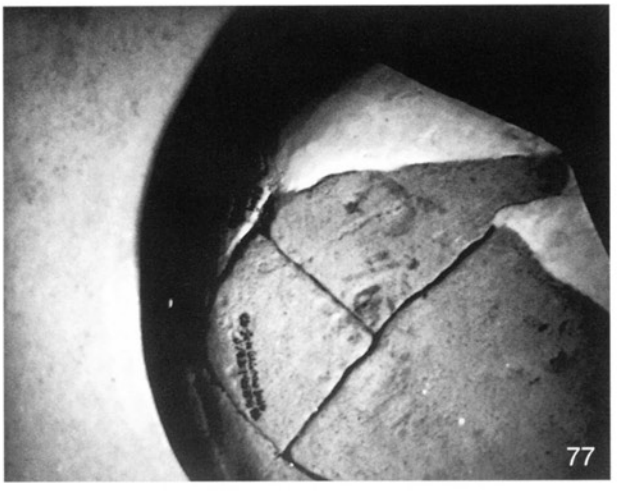
38

39

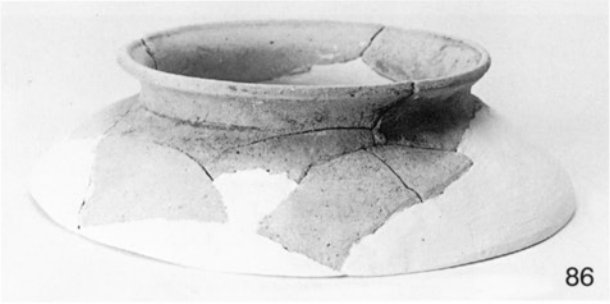
41

図版２　出土遺物（２）

図版３　出土遺物（３）



図版４　出土遺物（４）



図版５　出土遺物（５）

106

108

109

111

118

112

122

129

113

119 120

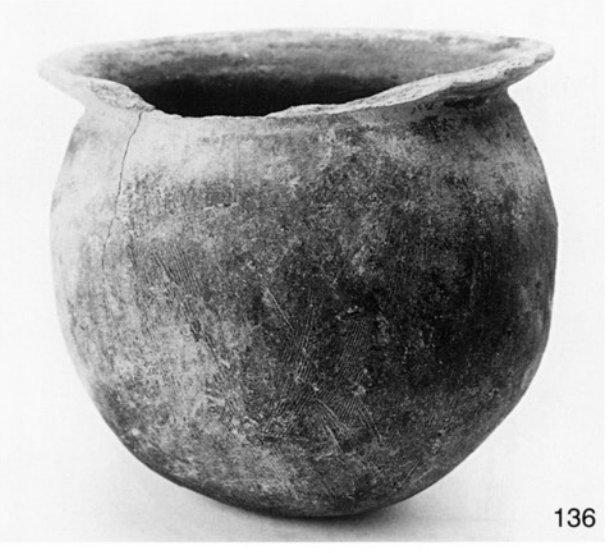
113

125

図版６　出土遺物（６）

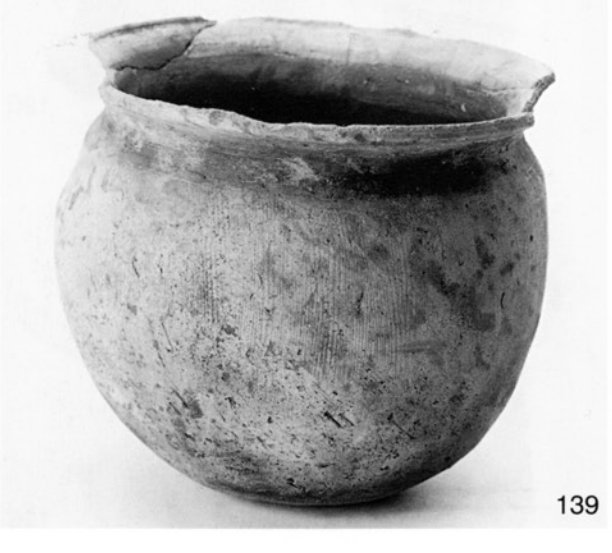
124

126


136

137

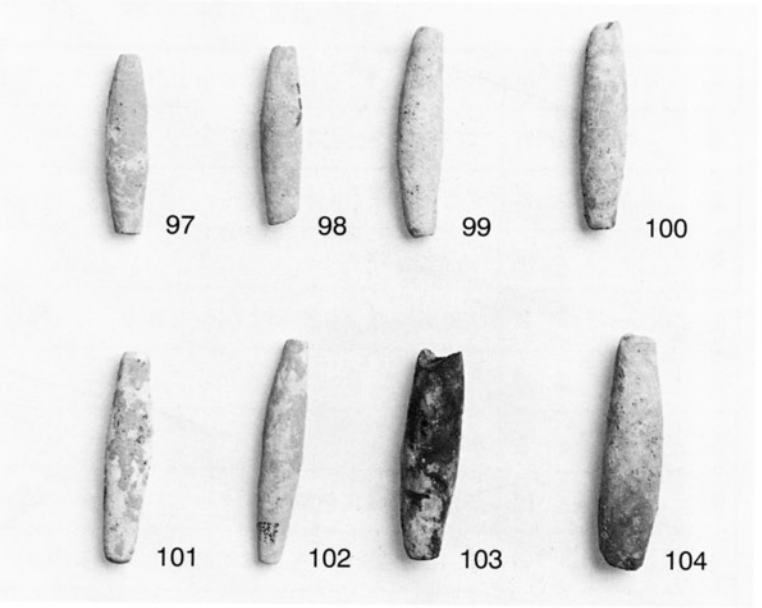
138


139

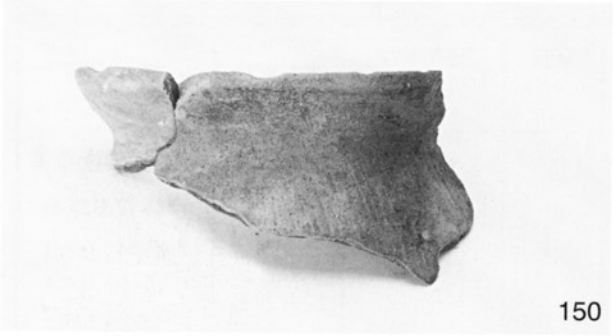
140

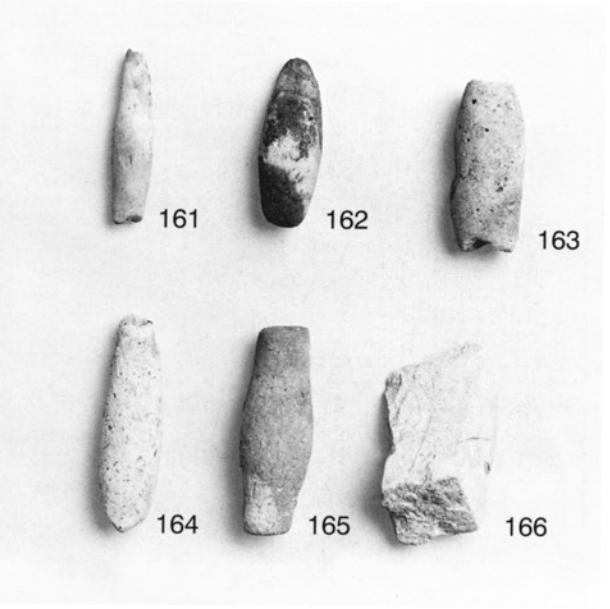
図版７　出土遺物（７）

142

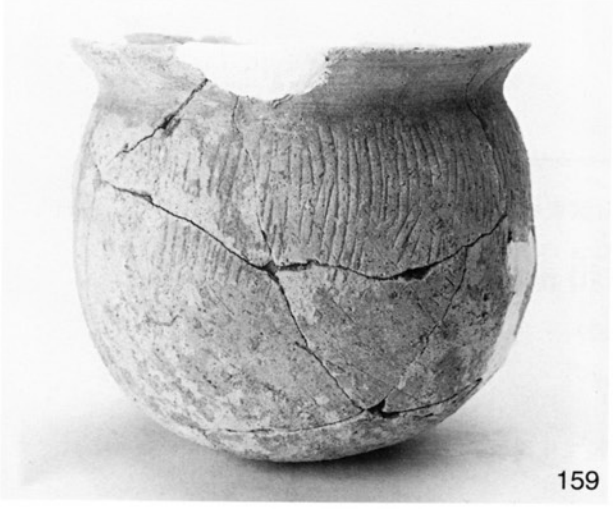

97
98
99
100
101
102
103
104

146


150


161
162
163
164
165
166

170


159

174

図版８　出土遺物（８）

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうさくいせきはっくつちょうさほうこく
書名	惣作遺跡 発掘調査報告
副書名	～三重県津市殿村所在～
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告２３３
シリーズ番号	
編著者名	水谷 豊
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 ＴＥＬ0596(52)1732
発行年月日	2002年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査面積 (m²)	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
惣作(そうさく)遺跡	津市(つし)殿村(とのむら) 字惣作(あざそうさく)	24201	824	34° 43′ 19″	136° 28′ 26″	1,300	平成12年 ６月12日 ～ 12月28日	平成12年度県営 ほ場整備事業 (津中部地区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
惣作遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代	方形周溝墓 土坑 流路 掘立柱建物 井戸 土坑 ピット 溝	壷、甕 土師器、須恵器、 黒色土器、製塩 土器、斎串など	弥生中期後葉の方形周溝墓 ８世紀後葉～９世紀初頭の 一括資料 条里地割に沿う溝

平成14(2002)年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告233

惣作遺跡発掘調査報告

～三重県津市殿村所在～

2002年３月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 光印刷株式会社